

P W P

Parallel World Program



——そこに観えているものだけが、世界の全てではない。
だが、観えているものはまぎれもなく世界の一部である——

朱縞模（あけじま かたぎ）には赤い世界がみえる。

きっかけはほんのささいなことである。片目だけのかゆみをこらえつつ、そもいかずと擦り、「お前、片目だけ充血してるぞ？」といわれて目薬をつかうも良くはならず。彼の瞳はやがて別世界をうつすようになった。

朝おきて、鏡の前に立ったところで特にかわったところはない。ただ、左眼からみる自分の右眼が普通より赤いというだけのこと。

では右眼からみえる景色はどうだろう？ 朝食を終えて、登校するなか、周りの光景をみるとわかる。

建物はゆがみ、地面からトコロテンでも突きだしたかのようにウネるものもあれば、ねじれてそびえるもの、左眼での素材とちがう材質で建つものだらけ。

影響は建物だけかというところでもない。右眼には“誰も”うつらない。

ゴーイング・マイ・スクールな徒歩で十五分の距離、ゆるやかな坂の西世津戸の高校へと上る道。そこにはたくさんの生徒がいるが、右眼は赤色のブラインドがかかったワイパーでガッツと視界の意味をかえている。

それでも彼にとって、そんなことはどうでもよかった。

彼はいつでも……逃げていた。臆病だった。

高校一年。レストランなどで名前を書くと、「あかいシマ模様」という意味をネタに自己紹介する季節はとうに過ぎた。あるいは「模（かたぎ）」なんていうヤクザがかった名前を覚えるのが面倒なのか。……ちなみに「模」とは染物につかう、模様を彫刻した板らしい。結局は模様なのか……。

できるだけ、教室には後ろから入る。誰ともぶつからないようにするのはもちろんのこと、このクラスではめったに会話をしない。というより気軽に話す友人は二人しかいない。話しかけられてもこまる。

……なにしろこっちは名前を知らないのだから。

僕の臆病は「クラスメイト」という概念を払拭した。代わりに「赤い世界」を受け入れた。なにしろこれほど気軽なものはない。そんなんだから現代社会はコミュニケーション能力がどうかいわれてるんだろう。やれやれである。

もちろん、右眼のことを相談するようなこともしない。だいたい想像しうる結末は二パターン。病院か、無視か。それなら誰にも話さないほうが得策だ。他人にも充血やコンタクトにしかみえないだろうから、生活に大きな支障はない。右側から話しかけられたりするとこまるが、あいにくそんな事態にはまだ遭遇してない。

けだるげなホームルームがはじまり、おわる。数式が長くまたがると視線が右往左往するのがややおっくうだ。……おっくうだが、それだけだ。成績とひきかえに静かな午前が得られるなら、それで充分だったりする。

教卓をさまよう教師の腕が、赤い視界のボロボロとくちはてた岩肌へと溶けてはもどる。あるいは、ちょうど境目の部分で語るのをみとどける。

死角の範囲は耳でおぎなう。みえるものに意識を傾けないのはその他大勢に興味がないのと、意識しようにもコンクリと鉄柱しかない背景に感慨をもてないのと、どんよりした赤色にひしめく螺旋の塔があろうとも、どうしようもないからだ。

それが四時間ほど続く。いたって普通の、なだらかな午前の終端をむかえる。

チャイムと等速で鞆をつかまえると、光の速さで南校舎へ向かう。

西世津戸とよばれてはいるが、この高校は山に近い気がする。校舎が三棟つらなる北校舎一もっばら文化部の棟、二階に生徒会室一の裏、山だらけ。世津戸は海の街といったヤツはぜひこまで来てみてほしいね。駅から徒歩で。

はさまれた真ん中は、上から一、二、三学年の校舎。三階から南校舎に行くには、いったん降りて渡り廊下からむかわなければいけないのでそこを通る。

南校舎は、理科室とかが端にひっついているが、職員室や会議室の棟。つまりは用事がない生徒が出入りしない場所だ。

渡り廊下を通ってすぐにある階段を、なかば上がったリノリウムの踊り場に対峙してステップに腰をおろし、弁当を広げる。

この南校舎は、職員室が一階にあるから、当然教師がこの時間通りかかることもある。そこに一人で食べていればみ咎められるような気がしたのは最初だけで、数人集まればスルーされてしまうらしい。

まず間違いなく二分前後にみため不良少年の青空真昼（あおぞら まひる）が手刀のような合図を挨拶に渡り廊下からあらわれる。この合図は機嫌によってかわる。手裏剣飛んできそうなやつとか。

彼の到着のあと科目によってまちまちだが、上からくる気がする宇和臯（うわ さつき）は下からきたりする。「下からきそう」とかいうと「奇想天外」とか言って背後にいたりする。ちなみに正しくは「神出鬼没」である。上手いこといったつもりか。

「あ、なんか今、失礼なこと考えてた」

「.....真昼ちゃんほどじゃないよ」

「なら許す！」と臯が両腰に手をあて平行四辺形をつくる。ツインテールが揺れる。

「えっ？ 許すの？ 許しちゃうの？」と真昼ちゃんはキョドる。そういうのを、内面は気にしてないにちがいないから半分は演技だろう、役者め。

真昼ちゃんは男だが、“真昼くん”でも、“真昼さん”でも、“真昼”と呼び捨てにしてもダメだ。“真昼ちゃん”が正しい。そこは間違えてはいけない。二回は訂正されるが、三回目を聞いたものはこの学校にいない.....らしい。

教師とかある程度の例外ルールはあるらしいけど、守らなければ彼と親しくはなれない。笑顔で指をポキポキ鳴らす。

そんな彼がここにくるのは興味を引くものがクラス内にないからだろう。「世界を平和にしたのなら、まず人間を抹消すべきだね」という言葉をきいて、むしろ離れていく人のほうが多い。

ちなみにそれを「そうだね」の返事でこたえたら親しくなってしまったパターンは、今のところ僕だけらしい。

つまり彼は、好奇心という欲求にもものすごく従順なのだ。

臯も好奇心の生き物だが、ちょっと気色がちがう。真昼ちゃんが食べる方なら、吐き出す方だ。

彼女のその名前から『“うわ さつき”は“ウワサ好き”』などといわれた時期があったが、真実はだいたい逆なもの。そんな発言をした人間が次のウワサの対象になっているという.....って、完全に怪談だコレ！ 階段だけに。

まあそれだけ影響力の強いお方である。真昼ちゃんに興味を引く程度には。

「題名のない昼食会」はだいたいこんな感じで始まる。

真昼ちゃんの八割はコンビニ弁当であり、二割は紙パック飲料でできている。牛乳とか牛乳とか牛乳とか。あとコーヒー牛乳とか。

階段の右端を陣取り踊り場をむくことで、左側に真昼ちゃんがみえるようにする。

そうするとトライアングルに臯が階段に腰かけたり、あるいは踊り場右奥へ座りこむ。雨とリノリウムの相性や、たまーに僕が遅れてくることで配置がかわるが、おおかたこんな具合。

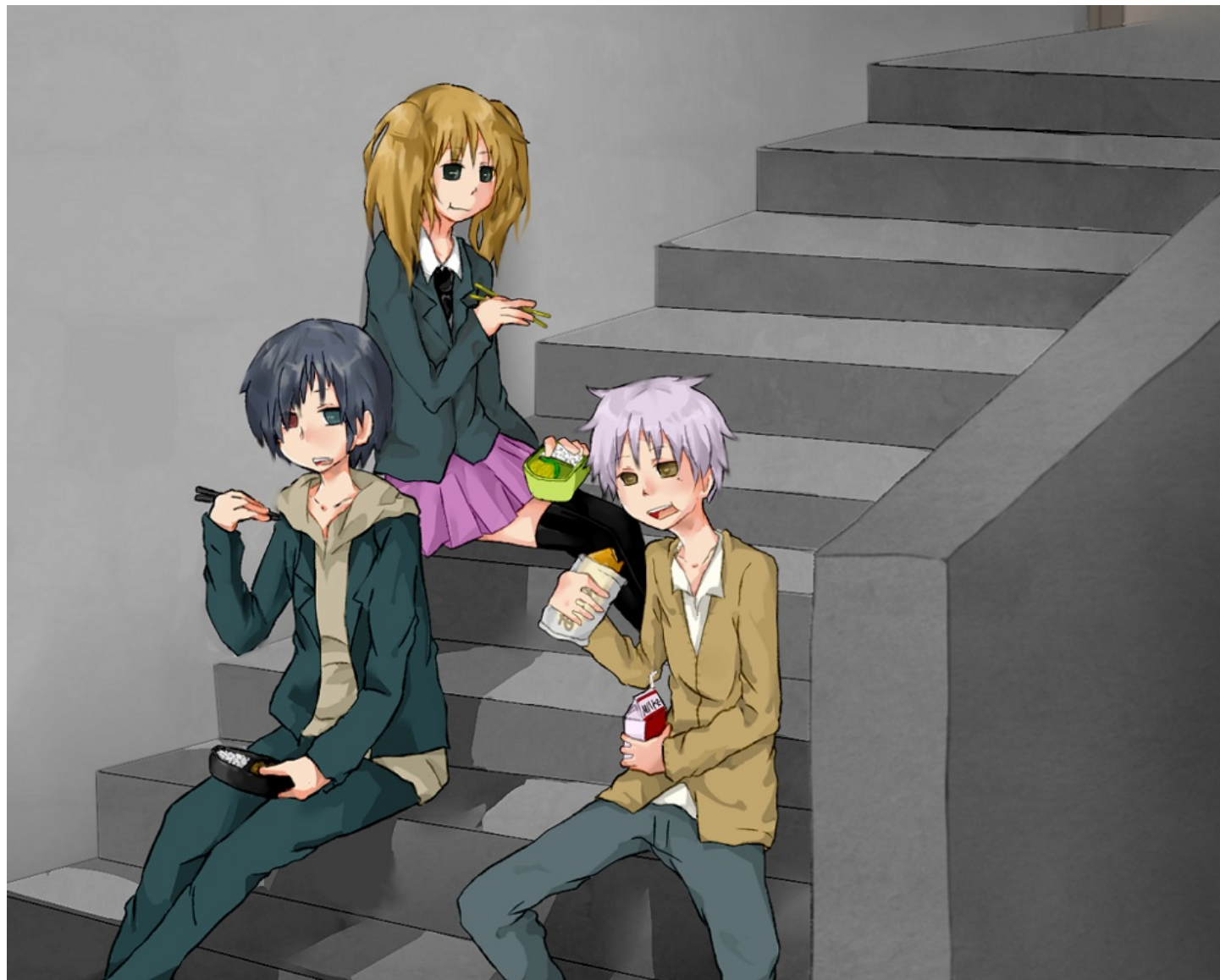
臯の弁当は自炊されたものがメイン。なぜわかるかといえば、夕食の残りの野菜っぽいものや、ラップが巻かれたおにぎりが垣間見えるからだ。

僕は二人の中間。飲み物を買うだけのコインが、毎朝台所に置いてあり、弁当がなければ五百円ということだ。

一度、置き忘れにぞっとしながらも臯におすそ分けをもらい「うっめ。コレ、うっめ、なにこれ」状態になった。ただのおにぎりですら酔の調節で味が違うのだから、あの巻かれた卵焼き

は幸福に腹を壊せるだろう。

.....さすがに何度も申し訳ないのではないが。つい手が出る何かがそこにはあった。



昼飯を終えると、真昼ちゃんが目薬をさしていた。.....あー。そうえば次は体育だったか。

「ふつう、逆じゃないの？」

っと、ウワサのさっちゃんがツッコミをいれる。

「なにか模（かたぎ）から不穏なオーラをかんじる.....」

なんでわかんねん——と、いたいところだが、これが彼女の特技だ。顔色から時代のルーツをうみだす天才。

「.....次の時間に体を動かすのが嫌なんだ」

「球技恐怖症？」

なにその新しい症状。

「まあ大体、二人とも“参加しているのをみたことない”けど」

素晴らしい観察眼をお持ちだ。.....というかそっちこそ、いつもどうしてるんだ。

それはともかく。真昼ちゃんはグラウンドの砂埃より、ほかの普通の生徒のほうが目障りなので目薬をさしたとこのこと。実に彼らしい。

そして今は体育で球技。なぜ競技名をしらないか、それは興味がないからである。眼のことは真昼ちゃんにはいってないけど、それについて聞かれたこともないのに彼は程よく察してくれる。つまりは二人でネット脇でフケてたりする。

体育が苦手とかより、右眼から飛んでくるものがわからないから、左に受け流すしかない。そうでなくとも球技は苦手だ。

ところでだ。こういうことを繰り返しても、僕に問題が起こることはない。なぜよびだしを食らわないかといえ、ひとえに二人のおかげだ。

二人に共通するのは「影響力」だ。真昼ちゃんが僕を連れだし、皐がそれを打ち消すようなウサを流す。どんな問題があっても、この二人はやすやすと状況をかえてしまう。

そのことについて真昼ちゃんに話すと「何？ 量子デコヒーレンス？」って言ってた。………
…多分、ちがうと思う。

体育については事なきを得た。これもいつものように真昼ちゃんのおかげである。

緩めの下り坂を降りていく。ちょうど真南にむかう通学路は、落ちゆく夕日を正面に、自宅へ続いていく。

陽の色を切る建物の影たちをみながら帰る。そのコントラストと右眼の色が近いからだ。

もともと住んでいる街なのに、離京した旅人が故郷にもどってきたかのような気分になる。

どちらの眼にも、恐ろしいほど人がいないのが心の救いだ。自覚するまでもなく、相当な人嫌いなんだな……自分は。

ゆがむ黒い巨塔や、赤い空と元のスクリーンを比べてみる。どこか変わったところや特徴がないかとか。たとえば現実で工事だったり、あたらしい店舗が建ったときどう右眼の風景が変わるか。共通点としては、支柱みたいなものがいきなり立つというより、ねじれた地面が盛り上がった、外装に近いコンクリート（同じ材質かどうか定かではない）が徐々にあらわれるという具合。人は居ないはずだった。

——そとのときまでは。

まるでスカーレットの本縞子（サテン）のドレスのような風景。赤をなだらかに、あるいは滑らかに影がある波のような通学路。

そこにミルクでもこぼしたかのように、白く。路地の陰から、一人の少女があらわれた、“右眼の視界だけ”に。

それは文字通り「目を疑う」という現象だった。

えっと、そう……その一瞬に言葉がでてこなかったが、白人（アルビノ）。

現実ばなれした肌のきめこまやかさが、黄色人種ではなくて外人では？と思わせてしまう。しかし、顔立ちはすくなくとも日本人。

服のワンピースも同じく白く、十代前半の幼げな顔立ちがこちらを覗いた。

眼が……両目とも赤かった。

「ひゃうっ！」

ひゃうって……。これも幻想の一つかと思ったが、声は両側できこえる。

『やせい の 白人ロリータ が とびだしてきた！』

——って！ ちげーよ、ボールごっこの萌えっ娘モンスターじゃねえよ！ 現実だよ、三次元だよ二次元じゃねーよ！

あ、「※ ただし異次元にかぎる！」とかそういうことですか？ なるほど、いやいや。それにしたって怪奇現象じみてはいる。なんだ、これは。なんなんだこれは。

……いままで右眼の視界には人間はうつらなかった。もしかしてそれは誤りで、ほんとうはうつるのか？ あるいは別の人種が住んでいる？

確認しようと左眼で（すこし不自然になるが）顔を動かしてみる。驚いたことに、こんどは左にはうつらないときた。

そんなことをして立ち往生していると、彼女はもといた路地にターンして走り去った。

『やせい の 女の子 は にげだした！』

“コ”の字の正面には前面に厚めのガラスで覆われている。奥にだけ出入り口があり、無彩色の壁と床。システムのための大型のモニターやコンピュータはあるものの、それ以外に仕事、こと書類やら筆記具は置いていなかった。下手したら椅子すらないかもしれないような場所には、コーヒーの入ったマグがモニター脇のキーボードのそばにあった。湯気は立っていない。



仮本優衣（かりもと ゆい）は問いかける。直情的な彼女が理解できるのは「どこに銃を撃てば効率的か」という類のものだった。だから彼女は待つという概念がことごとく苦手だった。だから問う。

「……なにをやっているんですか？」

“いったい、いつまで。そこで”という意味も込めて。

それに対して。貴那崎雄也（きなざき ゆうや）が俯瞰（ふかん）し、観測する。だから彼は当たり前のことを述べる。

「シンシアの観測だ」

だからこそ優衣は疑問だった。彼は、もう何日も寝てない。

「現実を直接プログラムする」という方法を貴那崎は探し当てた。もちろん彼は現実主義者（リアリスト）だから、その魔法のような技術を最初は信じていなかった。

だがそれはまさに魔法だった。魔法は存在した。いわゆる量子力学で使われるような波動関数の収束に関する話に近い。

準備がどうであれ

内容がどうであれ

原因がどうであれ
数式がどうであれ
材質がどうであれ
過程がどうであれ

ある一つの結果を観測すればいい。

——実験段階の技術として、貴那崎は物体を燃やすのみせてもらった。しかし、直接手を触れているわけでも、可燃性の物質も発火する装置もなかった。ほとんど魔法に近い現象だったが、魔法ではないらしいことは確かで、魔力のような何かが必要なわけではないからだ。

実質的にはその現象（つまり炎があがるまでのプロセス）を分解し、ある特定の単位から逆に自分の意識や、必要機材の動作にもとづいて燃やすための物体の振動を想定する。発熱とは物体の振動だ。この場合は単に炎上させることも可能な処理。そして、「プログラムの実行」をかける。

もちろん、真空だったり、プロセスに誤りがあったり、処理の内容次第ではエラーになる——。

「実際にはなにが起こってるんですか？」

優衣がまたもや問いかけ、夢想がさえぎられる。

「そうだな……………」

貴那崎は首飾りをさすりながら答える。

「まず、普通は現実の空間に異次元の位相をするのは困難だ。

第一に機材。第二に資金。第三に時間。

二つめの問題まではクリアできても、三つめで寿命をとっくに超えては台無しだ。ましてや、四桁の年数を、機械や人材で維持できると思うかい？」

「……………いいえ」

コーヒーをあおりながら、淡々と続ける。

「そこで、だ。現実に対してプログラムをおこなう」

「現実に対して？」

「ああそうだ。『現実シミュレーション』なんだ。この世界自体を一つの大型コンピュータだと仮定して、内側からハッキングする。そして無理なく仮想空間を創る」

「大型機材を用いずに、無理なくですか？」

「ああ、機材は必要ない。それに関わるコストや人材も。……なぜなら、もともとの質量数を変化させてないからだ。……つまり、世界の見方を変えるだけで、あたかも異世界に見えるだけで、実際にはどちらも現実なんだよ」

飲み終わったマグのそこには、茶色の二重の環がみえる。

「たとえば、このマグ。上からみれば“円”横からみれば“四角”というふうに、みる角度によって形がかわる。俺たちには「あるもの」が“円”にみえても、シンシアには“四角”としてみえる」



「シンシアに“四角”がみえるのは何故ですか？」

「彼女がそう定義しているからだ。内側からね。……観測者が内側から世界の分子の物質的性質を並び替えているんだ。なんとなくだが、宇宙の膨張に似てる仕組みさ」

「……………はあ……………」

「コーヒーのシミが、まっさらなシャツに染み込んで、色を作っていくようなものだ。……それが《Parallel World Program (パラレル・ワールド・プログラム)》だ」

情けなく「まって！」といいつつ追いかけようかと思った。けど、左眼にはあいかわらず車が横切っていたので、やむなく追うのは断念した。

しばらくボーっとしてしまって、信号の変化にけどられた。ああそうだ。交通ルールに縛られた世界の住人だったよ。思い出した。

……いま、玄関を閉め脳裏によぎるのは、ほとんど幽霊にであったようなものだということ。脚はあったし透けてもなかった。それに、前提がおおまちがいなんだから超常現象のナナメ上をひた走っている。赤い世界ではもともと人間が居ないのに、少女があらわれたのだ。

鳥肌やら恐怖心やらの前に、まず捕まえて話をしたかったが、結局、女の子には逃げられてしまった。とはいっても急におきたことだから仕方ないんだけどね。

帰宅早々に遊ぶ気持ちなどない。もっとも荒廃と真紅の交差する街がみえはじめてからはいつものことだ。

(疲れているのかな)

真っ先にむかうのは洗面台。もっとも手を洗うのではなく、顔を洗う。まったく目覚める気などしないが、顔を洗う。

このとき、いつも鏡を見ないようにしている。赤のフィルター越しでも、左眼でも、自分という人間はうつってしまう。その矛盾に耐え切れる気がしないからだ。いつもなら。

したがって、いまは違った。

なぜならその孤独に疑問を持つべきことがおきたからだ。

(やっぱり疲れているな)

早急に寝ることにした。

翌日。おきて顔を洗うとき、鏡をみる気はまったくなくなっていた。

ほとんど幻想か夢か、もっぱら幻覚で説明がつけられそうだったからだ。それでも適切な色が視界に戻るわけでもなく。朝、というか登校の時間はやってきてしまった。思ったよりは早く日が昇った。

右眼の太陽がまっ赤なわけではなく、夕日ともにてもにつかぬ旭（あさひ）。“登校”の文字通り、駅前から学校へとまっすぐ登って校門につく道。後ろ手の駅北口からワラワラ、あるいはチマチマと学生諸君が顔をだす。「おい、出席確認間近の時間帯だろ」とは間違ってもいわない。

確率でいって二分の一で真昼ちゃんと遭遇するが、それはなかった。

もちろん、あの少女と会うかとも思ったが……昨日出現したポイントにとおりすがっても何もでてこなかった。

ねじれた灰色の建物が学校まで、並木のごとくあるだけだ。

リノリウムの緑の床と廊下用スリッパがお気に召せば、この階段での昼飯はまあまあ楽しいものだ。真昼ちゃんも臯もちがうクラスだから、ここ以外は移動教室とかでないと話ることがない。というよりもまあ、話さないようにしてる。

「今週のトレンドは“『合わせ鏡』の四十四枚目は異空間に繋がってる”でどうかしら！」

階段だけに怪談の話だった！ しかもネタが古い！

そんなことをいうのはもちろん、宇和臯、その人である。

「本当は“自分と違う動きをする”なんだけどね」

「それは捏造っていうんじゃないか……？」

「リスペクトと呼んでほしいところね」

「誰をだ。それならいっそ、ちがう人がうつりこむ系にすればいいのに」

……いつから気がついたが、どうやら昨日のことを気にしてるらしい。

ようやく食べ終わった真昼ちゃんが会話に混ぜてくる。

「そもそもドコを基準に四十四枚なんだ？」

「四次元とかそういうこと？」

「そうじゃなくて、一枚目はなか側？」

「……ああ、そういうこと」

「というか、片側だけを一枚と考えるとややこしいな」

そういいながら真昼ちゃんはコーヒー牛乳をあおる。

「そんな数え方しないでしょ」

「というよりは……合わせ鏡は無限に続くわけじゃないからそこまで数えれない気がする」

「え？ どうしてよ？」

「『回折限界』っていう現象があって、平行する二枚の鏡だとその小さな像の数に限界がある」

「ロマンがないわねえ……。それで、『回折限界』って？」

「お前は人に話をきかせるのが上手いのに、ききとるのは苦手なのな」

そうでもない気がする。いまのは真昼ちゃんがかかり説明をはしょってたような。

「ある波長の電磁波——この場合、光——は、像が小さくなるとそれ以上像を小さくできない。鏡と鏡の距離がある程度離れてると、像が小さくなるだろ？」

あーたしかに。トイレとかのレベルじゃ小さなサイズしか写せないな。

「じゃあ大きな鏡でやらないと四十四枚は数えられそうもないね」

「そういうこと。これがぴったりくっついてるぐらいの距離とか、万華鏡みたいに三枚だと無限に続けれる……気がする」

「ぴったりくっついてたらまさにオカルトね」

いやそれ、みる人がそもそもいなくなってる。

「別の考え方だと『回折限界』は、たとえば『赤い光』でCDを書き込むよりも、『青い光』で書き込んだ方が『青い光』の方が波長が小さいから、より狭い領域に情報を書き込める。つまりは同じ大きさならより多くの情報を書き込める、という使われ方もしてる」

「ブルーレイってヤツね」

「そうそう」

……と、こんな話をしていると昼が終わる。

まったくいつもと変化のない空だが、今日の午後の授業でそれを拝むことがない。

体育が無いという一点において本日は行幸なり。

机の角から外を臨（のぞ）めば、そこには赤い背景に黒い塔があっちこっちにしなだれかかるビックアバランチの連続である。

そういえば、昨日のことを真昼ちゃんに相談でもしてみようかと思ったのだけど、やはり前提の説明が面倒なのでやめた。

もちろん、青空真昼と宇和皐のレベルなら何も疑うことなく聞いてくれるのでは？ という想いもあるのだけど、いまだ常識という枷（かせ）で自分の足をくくっていた。

本日は晴天なり。……晴天といえば青空で、青空といえば真昼だ、などと考えていた。

このときは――真昼ちゃんが翌日から消えてしまうとは思ってもかけずに。

事態に気がついたのは、次の日。いつものごとく昼飯の時間。

日当たりがいいのは悪くないが、だからといって心地いいということにもならない階段の踊り場という一種のテラス。そこに真昼ちゃんがいることはなかった。教員が通りかかることはあったが、真昼ちゃんという一種の抑止力(?)がないとどうにも居心地が悪かった。

真昼ちゃんが休むということはまれだから、当然、皐も気がつく。

それでもって一一こと、皐という女性はウワサに敏感なのだ。

『青空真昼』が学校にきていない、というのはなかなかセンセーショナルなニュースのようだ。あまりクラスメイトを信用していないから知らなかったが。

皐いわく、ウワサをウワサでうち消すという高等でタクティカルな技術をつかってるらしい。……なんぼのものかわからんけど。

「まったく“真昼”がいない真昼なんて皮肉ね」

とは口でいうものも、心配しているのはあきらかだ。でなければ『必殺ウワサガード』とよばれる(らしい)技もつかわないだろう。なんでも高度な社会学的知識と統計から編みだすらしい。よくわからんが授業でいかしてくれ。

そして一週間後。これまた予想外の展開へ導かれた。

もはやウワサを流す必要性すらなくなった。

異常事態に気がついたのもほかならぬ臆である。

「……『青空真昼』という認識がなくなっている」

うつむきながら、真昼ちゃんのことを思案しつつ、カツの入ったパンを食いかける瞬間のこと

。

「は？ ……ドユコト？」

「う～ん。なんていうか、そうとしかいえないことが起きてるのよ」

「具体的にどういう？」

「まず、学校の名簿から『青空真昼』という名前が消えてる」

意味がわからん。いや、真昼ちゃんだから何かやらかしたのかもしれない。

「あー、彼はー、まさかそんなことをするなんてー」

「全然そんなこと思ってないでしょ。……私もだけど」

「……………というか、それが一番最初なのか。ほかは？」

「クラスメイト……というより教員も誰も彼を覚えていない」

「……………」

しばし、意味を理解するのに時間を必要とした。

「僕は覚えているけど？」

「そういうことじゃなくてね？……誰も彼もがみんな、初めから居なかったような反応をするのよ。……机があるのはわかるけど、誰だったか、私がいわないとわからないとか」

「転校とかそういうことではないの？」

「それにしたって、まるで関係がある人じゃないとほとんど覚えてないのはヘン。あいつと話したことなくても『青空真昼』がなんであるかわからない、という反応をする人もいる」

……………それは確かにおかしい。

西世津戸高校で『青空真昼』といえばだいたい「ああ、“平成のニューウェーブ”のことね」とか返してくるはずだ。ニューという表現が軽々しくて逆に古臭い——それはともかく。覚えてなかったり、名簿から消えているというのはまさしく「認識がなくなっている」というのがいいのか？

「あー、彼はー、転校してしまったのー」

「だからそれはないって。……ともかく、まあ少しは調べてみるわよ。とってもスキャンダラスだしね」

……………いや、友人をダシにするのはどうかと。

夕暮れをみあげて歩いていた。暮れなずむ街をと口ずさむには、右側はとても不気味だ。道路は意外とすいていて、太い車道のところまで下らなければ右眼のせいで危なくなることもない。駅前の方までくると左にまがっていくことで自宅につくから、帰路は比較的安全なのである。

気温とともに日が沈み、心持ちは沈まずにたゆたっていた。

なんの気なしに反対側の歩道をむき、路地裏を覗く。いまにも前あった女の子でも出てくるんじゃないかと思った。

…………いや、それもけっこう自分勝手な偶然だな。それに、みつかったとしても真昼ちゃんにかかわる問題が解決されるわけでもない。

風が一一吹き荒れる。路地の奥から光、いや違う！ 白い人影が走りこんでいる。

さきほどまで沈んでいた気分は成層圏へとびでた。つか投げだされた。キラーン。

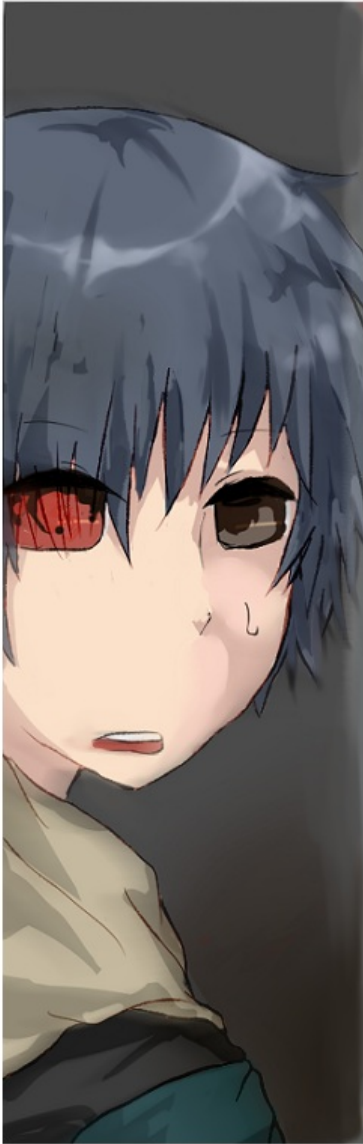
「いいいいー—————やあ—————あああああ！」

通報されるかもしれないレベルの、女性の悲鳴。足音というよりも、ゴゴゴという砂塵（さじん）舞う牛の群れの突撃のごとく。遠方から轟音が鳴り響く。音が初期微動だというのなら、振動は余震のようにゆれ、離れていたものが浮かび上がってくる。

（…………なに？ ……………この、……………なに？ 非常に説明しにくいんですが）

色白の少女がけっこうなスピードでなだれこんでくる。あのときあった少女だ。うわっ、脱兎だ！ 脱兎がいる！ うしろに獐猛なハンターもいる！

悲愴な表情とかスルーして、完全に泣いてる。脱兎のうしろ——“青空真昼”がまけずおとらず高速で追いかけてる。しかもフランスパン食いながら追いかけてる。なにこれ意味ワカンネ。



「ほれほふへにはへー——！」

もはや、食いながら走るなよという道徳感は浜辺に置き去りにしたんだろう。つか器用だな。唇でフランスパン食ってるのに飲み込みつつしゃべってやがる。なんてヤツだ！ アームがあきらかに六十度キープでギョインギョインしてる。褒められる点がないうえに素材がすくない超行動だ。マネはしたくてもできないし、絶対にマネしないでください。

あー、しかもよく聞いたらこれ、このセリフだんだんはっきり……

「ほれのふふへにはれ——！」（※ フランスパン唾えながら）

「おれのむふへになへ——！」（※ かつ飲み込みながら滑舌を意識し）

「おれのむすめになれ——！」……俺の娘になれ。なんでやねん。

そりゃ泣くわ。幼女を、フランスパンをかじる見ず知らずの男子高校生がストーカーとおりこして高速で迫りつつ、「俺の娘になれ！」と饒舌（じょうぜつ）に発音したら腹話術びっくりどころか泣くわ。とりあえず泣いて逃げるわ。眼も怖いし。

順調にフランスパンの長さ減ってるんですが、ギネスですか？ ちがいます？

「びぎゃー」と逃げる少女を「チューーン」と追いかける真昼ちゃん。なぜ追いかけているのか。なぜ彼はここにいるのか。とりあえずこっちの世界に車がないから安全なんだろうけど、これはちょっと止めないと危ないな。おもに真昼ちゃんを。

というより、この路地をさすがに曲がれないんじゃない。いや壁でも走りそうな勢いだなこれ。とか思っていると、とたとたの足音を百倍にした方が僕にぶつかってきた。

「あひゅうん！」

「あー。……………うしろ向きながら走ってるから」

「ううう……すまぬ」

すまぬとはまた古風な。

「……じゃない、急いでくれというか助けてくれ」

俺はタクシーかなにかか。それはともかく、ケリで止めてやろうかと思った真昼ちゃんが直前で止まった。慣性ってなんだっけってぐらいキレイに。そして同時に「ごっくん」という音。

完食しましたの合図。あるいは、獲物を追い詰めたようにも聞こえる。

「きさま、なぜここにいる」

「その説明の前にまずピアニストみたいな指の動きをやめなさい。あと君も、ちょっとききたいことがある」

「……………むう？」

脱兎のなりかけは、とりあえず真昼ちゃんをなだめたからそれを疑い逃げるのを一時中断したらしい。

「とりあえず、……名前は？」

「……………シンシア。……双葉慎詩亜（ふたば しんしあ）」

えらく外国人風な名前なのに、ちゃんとした字があてられてるのもついでに教えてもらう。シンシアの両親は子供にヘンな名前をつけるのが目的ではなかったらしい。よかったな。俺なんかカタギだぞ。とか語りたくなるのを抑える。

どうやら、いまのところPTSD（心的外傷後ストレス障害）とかにはならなかったらしい。なっても治療できないが……いや、真昼ちゃんが治療できるのか。それでも原因が治療するとか、悪循環だろうな。

「なんで真昼ちゃんは……その、こっちの世界にいるの？」

しばし逡巡（しゅんじゅん）する。というのも、もとの世界では僕は独り言をつぶやいてるだけだからだ。

「その“こっちの世界”というのはどうも間違っただけだぞ」

喋ったのはほかならぬシンシアである。

「たぶん……だが。おまえたちが住んでた世界とちがうとか、そういうことではなくてな。みえてる『観え方』がちょっとちがうだけだ」

いや、ちょっとじゃねえよ。だいぶなんだよ。

「むう。わかってはいるが説明というのはむずかしい。ようは存在してるものは同じで、みる人の解釈がちがうというか……」

いや、ますますわかんなくなってきたような……………。

「それって『人間宇宙論』とかは関係ある？」

と、意外にも真昼ちゃんがフランクに話しかけた。

「おお、それだ。お前はすごいな。シンシアのいいことがわかった」

「いや、わかったというか。……まあつまり、人間宇宙論で言うところ観測している世界が別ってことか？ ……あと、“真昼ちゃん”です」

当然のごとくっていうか、その訂正は年齢性別関係なく押し通すんだな。

「おお。……真昼というのか。では“まっひー”とよぼう。ちなみに世界がべつなのではなく“観てる人”がひとつの物質のちがう側面をかんじてるというか」

「なるほど。……あと、“真昼ちゃん”です」

あ、やっぱりそれ言い直すんだ。まあシンシアもさらりとスルーしてたけど。

「ええっと、その人間宇宙論って？」

「人間宇宙論——あるいは人間原理といって、宇宙が人間に適しているのは、そうでなければ人間は宇宙を観測し得ないからという考え方だ」

「……説明、もうちょっとなんとかならない？」

「たとえばだけど——まず、この世界の法則とかがちょっとでもずれてたら、宇宙の発生はしなかっただろうし、地球で人間が住めない。人間の細胞も遺伝子も、生成される酵素に狂いがあればたちまち死んでしまう。ようは『世界の法則があまりにも人間に優遇されている』というこ

とだ」

「……なるほど」

「そこでまるっきり考え方を逆にしてみる。自然界に人間という生命がいる、という逆だ。……つまり『人間が宇宙をみているから成り立っている』とね。ちなみにももちろん“観ている”のとはべつの五感でもあてはまるが、いまの場合はみているということ」

理屈はわかるけど、いまいち信じられないな。そういう考え、というか思考実験みたいなものは世の中のエンターテイメントにあふれてるから知ってるけど。

「おお、まっひーはやっぱり説明うまいぞ」

「ふむ。……とりあえず人間原理はいいとして、なぜ『こっち世界』がこう、いろいろみえるものが違うかわかるか？ ……あと、“真昼ちゃん”です」

「ん？ “くらいあんと”がいうにはだな。“でいらっく”をとおって、もともとの世界のパーツの数字をバラバラにしてくんで、逆の“かしこう”をのぞくからアルビノなんだといていた」

なんだか話が勝手に進んでいくな……。

真昼ちゃんは、人差し指と親指でフレミングの法則であごを撫でて、シンシアに再び向き直る

。

「……………面白い」

うわ、この人超速で理解できるなあ。ヤマなんとか博士もびっくりだよ。いや、さっきビックリスタントに似たなにかをみた気がするけど……。

こんなときは一つ一つ聞いていかないとこっちの理解に苦しむ。

「その“でいらっく”って？」

「おそらくイギリスの物理学者、ポール・ディラックによる『ディラックの海』の概念。真空が、みることはできない——つまり観測できない——『負（マイナス）の電子』で満たされてるってヤツだ。ディラックがとある方程式をつくる過程で考えられた。のちにその『負（マイナス）の電子』ってのは陽電子だとわかった。虚数空間とも呼ばれる」

クライアントについては無視なのか。

「それで……その先の『もともとの世界のパーツの数字をバラバラにしてくんで』ってどういうこと？」

「つまり、赤い世界ではイオンや電子、量子であらわせそうなもの。そして“眼にうつるもの”は数字、おそらく二進数的なものを基準として置き換える。無限の数列ができあがる……………」

そういうと真昼ちゃんは、胸ポケットから生徒手帳をとりだしてなにか書きはじめる。よくも律儀にもってるものだ。ふつうの学生なら逆にそれをつかうまい。

$S = 1 - 1 + 1 - 1 + 1 - 1 + 1 - 1 + \dots$ のとき、

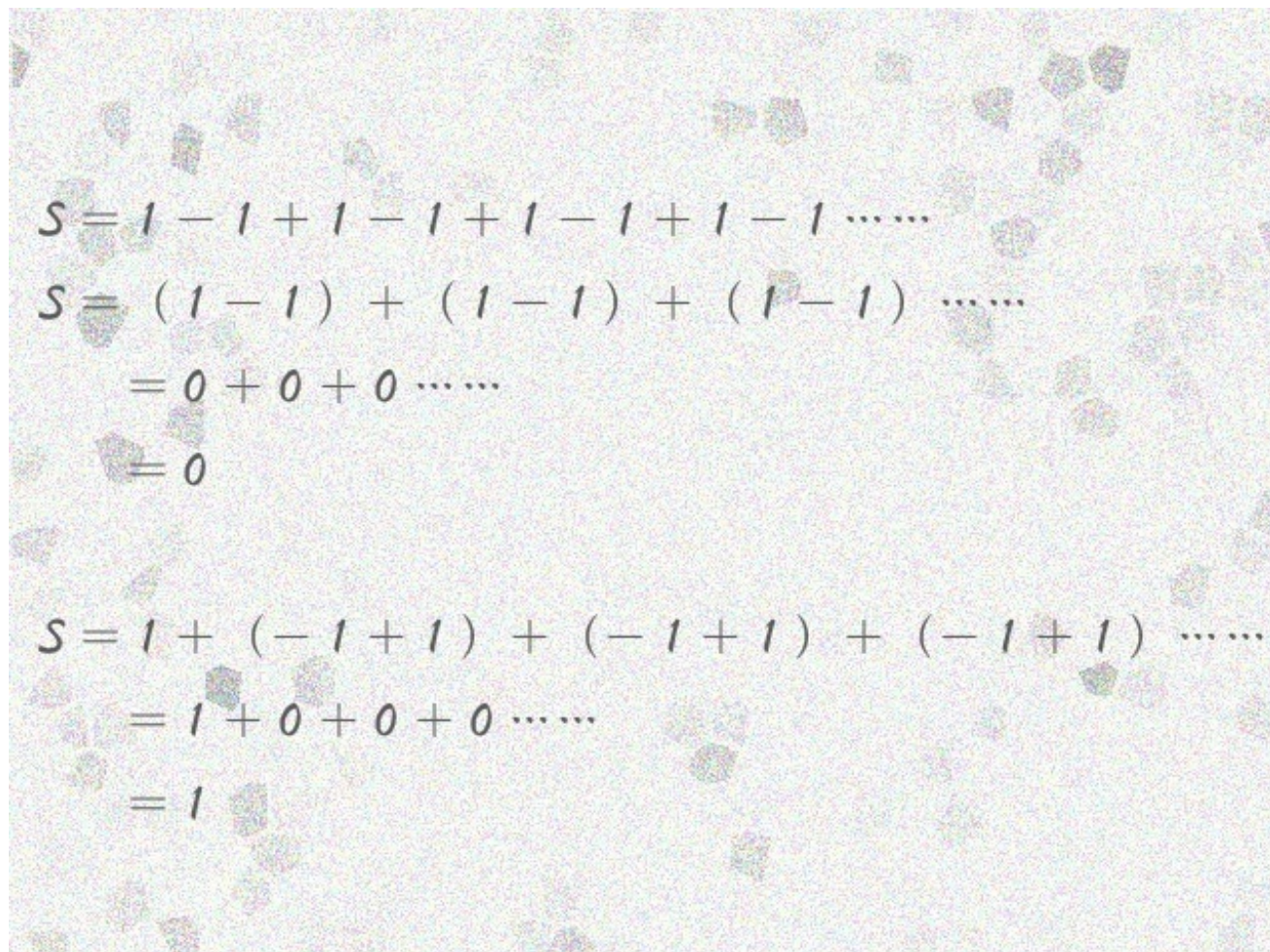
$S = (1 - 1) + (1 - 1) + (1 - 1) \dots$

$= 0 + 0 + 0 \dots$

$= 0$

しかし、

$$\begin{aligned}
 S &= 1 + (-1 + 1) + (-1 + 1) + (-1 + 1) \dots\dots \\
 &= 1 + 0 + 0 + 0 \dots\dots \\
 &= 1
 \end{aligned}$$



「…………と。こんな感じで無限につづく数でも、計算の順序次第で結果の数が変わることがわかる。つまり、内在する電子などの計算順序をいれかえることで、全体を飽和する粒子や量子の数をかえることなく別の物質をうみだす、あるいは知覚できる」

「だいたい、まっひーなのであってると思う」

そういうシンシア。確信はないのか。……といっても難しすぎて覚えられないのかもしれないが。

「その結果が赤い世界ってこと？」

「おそらくは。……あと、“真昼ちゃん”です」

「うーん。それでもなんか釈然としないなあ……」

「たとえば。……そもそも、なぜ、『そこにボールがある』と認識できるかという、だ。太陽なり、電球なりからはっせられた光が、ボールにあたり、ボールから反射した光が、眼の網膜にとどくからなんだ」

「はあ…………？ それで？」

「もしも光がボールとぶつかったも、跳ね返らずにとおりぬければ、透明なボールということになって、だれも気づかない。ようするに、光がボールとぶつかった、跳ね返るから、ボールの

存在を認識できる」

「つまり？」

「光以外でも、たとえば分子、原子の情報をプログラムのごとく入れかえて別の物質を知覚できる」

なんとなく、真昼ちゃんがいいことがわかってきた。

「しかも、この方法は“元の世界”の情報をかえないで、知覚できる情報をこっちの“赤い世界”にかえるから、莫大なコストがかかったりもしない」

その話をきいて、ひとつ思うところがある。真昼ちゃんのことを、学校のみんなが覚えていない件だ。

いや、でもその前に一つ……………。

「それでも、……どうして真昼ちゃんが“こっちの世界”にきたかの説明になってないよ」

「さっき説明しただろう？ 人間原理と光の話を、よーく吟味するんだ」

「いや、そのつながりがわからないんだけど」

「つまり、『こっちの世界にきた』という表現がそもそも間違いなんだ」

「えあ……………？」

そうって真昼ちゃんはスボンのポケットからなにかとりだす。

「たぶん、この目薬だ。……“こっちの世界”がみえるようになったから、観る人間にあわせると、“こっちの世界”にきてしまったように感じる」

「……………そういえば……………」

最初はこの世界がみえる前まで、おなじ目薬を使っていたのを思い出す。それから真昼ちゃんも体育の前後、もっぱら前に目薬をつかってたっけ。

「そこでおそらく、さっきの『逆の可視光線』と『アルビノ』にまつわる話がでてくるはずだ。ちがうか？」

そうって真昼ちゃんはシンシアの方をむき、手のひらで指す。

「うむ、そうだ。えへん」

ない胸を張るシンシア。いや、褒めてねえよ。

「“くらいあんと”がいうには逆の“かしこう”とか“すべくとる”によって、紫外線のとらえかたも逆らしい」

「はあ……………、そうなんですか？」

「そうなんだそうだ。それで、その環境に適応するにはアルビノがてきせつだとかなんとか」

なんでそんなに曖昧なんですか、シンシアさん。

そんなこんなで、専門家の意見をあおぐべく、真昼ちゃんにむき直る。

「わからなかったのか……………？」

「いやー、わからないでしょう」

「……………こんなに面白いのに」

「まず、その面白さがそれほどわからないですね」

「まあいい……………ようはこっちの世界の電磁波のとらえ方が逆なんだろう。おそらくスペクトル

が——というか、分光したときたまたま赤色にみえた。あるいは可視光線の赤からそれ以下の周波数の電磁波しか存在していない」

「ええと？」

「紫外線とか赤外線ってわかるか？」

「うーんと、……日光とか医療器具とか？」

「間違っていない。紫外線はとりあえず日光でいいとして。赤外線ってのは可視光線の赤色より波長がながい、つまり周波数がひくい、電波よりは波長がみじかい電磁波で、ふつうヒトの眼にはみえない」

真昼ちゃんはそこでいったん区切り、空をゆびさしながら続ける。

「数直線でみれば、赤外線は紫外線と対極の位置にある。……つまり、もともと紫外線が埋まった部分に、いまの赤外線のような何かがみえていて赤色なんだ」

「でも、そんな未知の環境に生きていけそうなヒトなんているの？」

「そこでアルビノの出番というわけだ」

といて、空からシンシアに指を振り下ろす。

「そうだぞ。えへん」

いや、だから褒めてねえよ。

「アルビノとは、遺伝子の先天的なメラニンの欠乏で、皮膚やからだが白い。瞳孔も毛細血管が透けてみえるから赤色にみえる」

そうやってシンシアの方をちらりとみると、シロウサギのような赤い眼がいったんこちらをみた。

「遺伝子疾患の影響で、チロシナーゼという酵素がチロシンをドーパキノンへ、そしてそれがメラニンになる。アルビノはチロシナーゼを合成しにくい」

シンシアの体をさっきの撫でるような指使いでさす。……やめろというに。

「虹彩に色素——ようはメラニン——がないから眼が光を調節できない。光を眩しく感じる。あと、皮膚が紫外線によわいから、発癌もきわめてたかい」

「そんな……………」

なんというか。目前にいる健気な少女と、がんという病名の結びつきは意外だった。

「そ・こ・で。さっきの赤外線の話になるわけだ。逆にスペクトルをとらえている条件なら紫外線の影響も、光を眩しく感じることもないんだらう。もしかしたら“こっちの世界”の方が快適かもしれない」

「……やはりまっひーはすごいな。説明がてきせつだ」

「そうか、なら俺の娘になれ」

「いやです」

「……あと、“真昼ちゃん”です」

「ん？ まっひーはそうみえて女の子なのか」

「男の子です」

「最近はやりの女装するほうか」

.....なんでそんなこと知ってるんだろう、シンシアさん。

「しません。.....あと、“真昼ちゃん”です」

「ん？」

「んんっ??」

誰か指摘してあげてください。ここにいない誰か、第三者さま。

「そういえば、なんでフランスパン食べながら追いかけてたの？」

実をいうと嫌な予感がしてあまり聞きたくない。

「ああ、.....ここ一週間に“こっちの世界”を探検してたんだ。それで、コンビニとか惣菜パンみたいな、日持ちするものがあるかどうかまず確かめてみた。驚いたことにな、翌日になると補充されてたりする」

翌日“こっちの世界”でも補充されているのは衝撃だが、さっきの数字の話思い出した。現実と数が変わらないんだろう

「でも、いつ消えるかわからないから、『質より量』ということでフランスパン、君にきめた！」

この人、まったくその節理を信用してなかったー！

「そこでシンシアをみつけたんで追いかけたということだ。“こっち世界”で他の人間はいなかったからな。.....つい脊髄（せきずい）反射で」

.....その脊髄に不穏なものを感じる。

「.....それが、どうしたら『俺の娘になれ！』につながるわけ？」

「よりそって意思をつぐ嫁にするには若すぎる。しかし、娘ならその先の未来への希望が持てる。まあ、道徳的な側面もちゃんとあるぞ。.....ということで、俺の娘になれ」

「いやです」

それを聞き終え、時間を確認したらけっこうな時刻。夕日も落ちてる。右側はワインレッドのまま。

「ところで、カタギ。どこに行こうとしてるんだ？」

「どこって.....自宅ですけど」

「.....スレてるなあ」

いや、そのセリフは真昼ちゃんにはいわれたくないな。

.....結局、家に帰ってきた。

いろいろわかったが、むしろわかりすぎたぐらいな気がする。

僕がなにかおかしいというより、眼の影響というのはあいかわらず信じられない。それでも、シンシアはいるし、真昼ちゃんが“あっち”にいる（という表現でいいのかわからないけど）のは確かだ。

「「おじゃましまーす」」

.....は？ 後続してシンシアと真昼ちゃんはいってきた。

「ちょっと待って、ちょっと待って。なんでいるの、っていうかなんできてるの？」

「おかまいなくー」

「はーい。.....ってちげーよ。そういうことじゃねーよ」

確かに両親は不在.....というか、もっぱら“あっち”では他の人間がいらないんだろうけどさ。

有無いわせず。真昼ちゃんは家宅侵入を平気でするつもりらしい。

「ほらシンシアも。あがって、あがって」

「いや、そこ。他人がうながすことじゃないだろう」

玄関で立ち往生していると、シンシアが悲壮な顔になる。

「あがっちゃダメか？」

うっ、なぜそこで小動物のような反応をする。

「.....あがっちゃダメか.....？」

う〜んと.....。

「いいよ。.....あがっていい」

そう告げると、とたんに明るい表情になり、わーいと家に入ってくる。

まあ家族もいないし、自宅でのひとりごとに誰か不審に思うようなこともないだろう。

「カタギー。台所はどこだー」

.....いや、真昼ちゃんはちょっとは自重しなさい。

僕の部屋に二人がいる。なんだか妙なむずがゆさがある。

シンシアはみため幼い少女だし、そこに男子高校生二人がとりかこむわけだ。かつ、僕の右眼だけでそれをみているわけだから、部屋がきゅうくつかどうかの感覚がにぶる。

「それにしても不思議だよな.....」

はいってきたときもそうだが、真昼ちゃんは家にはいってから始終まわりを観察しっぱなしだ。

「なにが？」

「遠くでみた景色はものすごくゆがんでいただろ？ にもかかわらず、ほら」

そういいながら各所の柱をゆびさす。

「なかの建築構造にはまったく影響はない」

「そういえば確かに……」

「これはあくまで仮説なんだが……やっぱり『観測者が内側から定義する』ってのとの関係があるんだらうな」

「どういうこと？」

「おおざっぱな景色、こと建物とかはグニャグニャだろうがどうでもいいんだらう。だけど柱とか人相をゆがませるとかはできない」

「……なるほど」

「とはいえ、人間が“こっち”にいるかどうかわからなかったし、まだ他の法則があるのかもしれない」

そう考えると気になるのはシンシアのことだ。

この世界にひとりぼっちのシンシアには“くらいあんと”がいて、彼らがここに連れてきたらしいことはわかる。そこから想像できることはいくつかある。

たとえば、連れてくる、というか“観させる”（？）手段。真昼ちゃんがいうには目薬らしいけど。その製造もとがクライアントなんだらうか？　ということは「赤い世界」があることになにか理由があるんじゃないだらうか？

そんなことを考えていると――

「カタギー。お茶ー。おかわりー」

真昼ちゃんが、比較的かつてに持ってきたお茶を。シンシアがガブ飲み。スッカラカンにしてる。

「飲むのはえーよ。さっき“おかまいなくー”っていったよね？」

「「おかまいなくー」」

「使い方まちがってるよ！」

それにしても、ものすごく短期間で和解したんだなこの二人。いまとなってはそれが若干妬ましい。というよりペース落としてくれ、お茶はもうないぞ。

「そんなことより……二人とも家に帰らなくてもいいの？」

「家がゆがんでて………つい」

「いや、そういうポケいらないから」

「帰っても楽しいことはないし、しばらくは二人といたほうが発見がありそうだからな」

それは、なんとも真昼ちゃんらしい。

「じゃあ、……シンシアはなんで？」

そういうと彼女はうつむきながら低い声をだす。

「家なんてなかったんだ……二重の意味で」

………なにそれ。すごく返答にこまる。

うすい沈黙が場をつつむ。と、シンシアは顔をあげる。

「というのは冗談で、あるていどは“ほーろーかのじょ”としての許可を“くらいあんと”からもらってる」

なんか心配したの気持ちが空中分解した。

「ところで、カタギ。……その……お手洗いはどこだ？」

あーもー。そんなにガブガブ飲むから……。

「……ほら、こっちの廊下を下って……」

そういいながら僕は――彼女の腕を“左手”でつかみ――――――引いた。

――観測した――所有権は右から左に受け継がれる――観測し直した――存在は確率であり認識だ――観測が変わった――。

「ひうっ!？」

っと、左手の先から、シンシアが突然身をすくめる。

「……え？」

「……お？」

っと、真昼ちゃんがじっとこちらをみつめてくる。

……双葉慎詩亜が“左眼”だけにうつっている。

「シンシアはどこに消えた？」

「そんな『チーズはどこへ消えた』みたいなノリでいわないでください」

突然の事態にまったく頭がついていかない。

「……………ひだい」

「……え？」

「……………眼が、……ひだいい」

「……えっと、えっと……？」

僕をじっとみていた真昼ちゃんが、実験結果から考察する物理学者のようにいう。

「“そこに”、シンシアがいるんだな？」

「えっと、えっと。はい」

「もしかして、眼を痛がっているか？」

あいかわらずこの男は観察するだけで現象の正体がわかるのか。

「そうだけど？ え？」

「眼がひだい……けど、お手洗いどっちい……？」

「ああ、えっとむこうです、そこの奥をまがったところ」

「ひぐう……」

非現実的な嗚咽をもらしながら、シンシアは壁伝いにとぼとぼ歩いていく。

その後ろから、トン、と肩を叩かれる。

「ちょっと聞きたいことがある」

「……なんでシンシアは眼を痛がってたの？」

「アルビノは光を眩しく感じる。痛いぐらいに」

そうえば、そんなことをさっき聞いた。

「カタギ。ずっと気になってたんだが。お前の眼は右だけ赤いんだ」

「うん……」

「俺も、シンシアも。……おそらく目薬をつかうと眼が赤くなるんだ。が、多分お前は片目だけ目薬をつかったな？」

「右だけかゆかったから」

眼をこすっててもなんか景色が変わってくるから、最初は自分の方になにかあるかとも思った。けど、それは目薬だとわかった。

「もしかしたら、左眼は元の状態がみえたままなんじゃないのか？」

「よくわかるね。……なんていうか、こう右側だけ“赤い世界”で左はいつもの無人の部屋というか」

赤い瞳をらんらんと輝かせた真昼ちゃんいう。

「……………面白い」

また、こんなときにこの人はこんなことを。そんなとっても楽しそうな顔されてもこまる。

「カタギには二つの世界がみえているにもかかわらず、『両目視野闘争』がおきていない」

「えっと……？」

どういうことだろう？

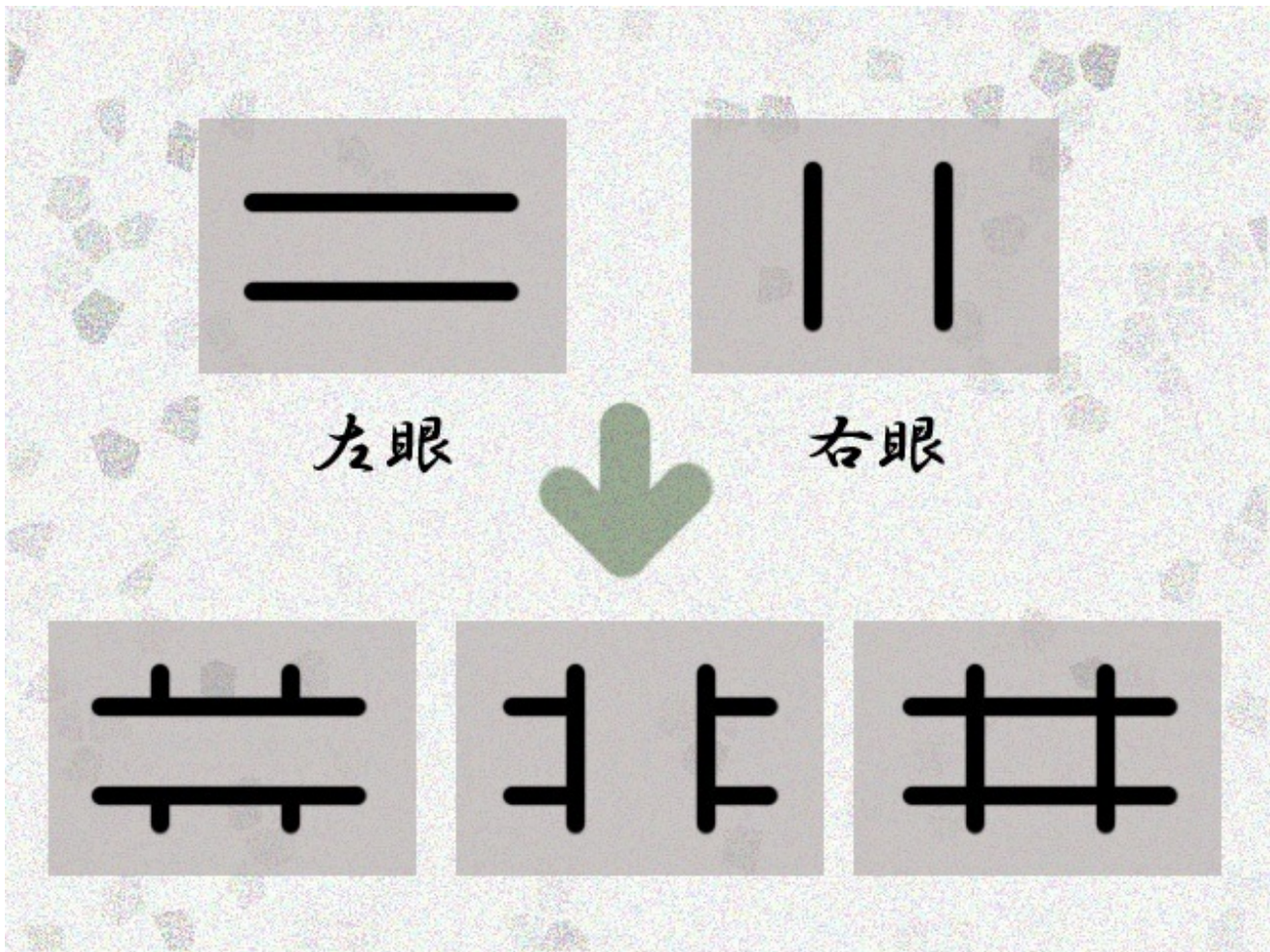
「ふつう人間は、左右の眼が“にっていない凶形”をみせると『両目視野闘争』という現象がおこる」

「といますと？」

真昼ちゃんは帰りのとき同様に生徒手帳をとりだす。

「互に関連性がひくい———というか、にっていない——形を両目にみせると……」

そういいながらメモスペースに、縦縞、横縞を描いて矢印を描く。



「……一方の図形が優遇してみえたり、かさなる領域でたがいに反発するような像になる」
 縞模様が交差する複数のパターンと、ウニのような模様がていねいに描かれていた。

「時間経過でゆれうごいて競いあうようにみえることから『視野闘争』という」

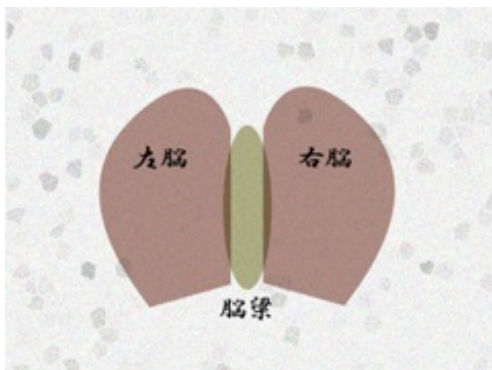
「……それで？ それがおきてないってどういうこと？」

「『脳分割問題』もしくは『分離脳』ってわかるか？」

「はい？」

「その『はい？』はノーということで話をすすめるとだ……」

こんどは、ブランクに脳を表す絵と「右脳」「左脳」の文字。



「その昔、てんかん治療として左右の脳をつなぐ『脳梁（のうりょう）』を切断する手術があった……」

「.....なぜに、そんな物騒なことを？」

「むかしは薬物治療よりも、ロボットミューするヤツが多かったんだ。それでも『脳梁』がてんかんをおこすのはわかった」

せめて切らずにどうにかしろよ。

「.....それで？切ったらどうなったの.....？」

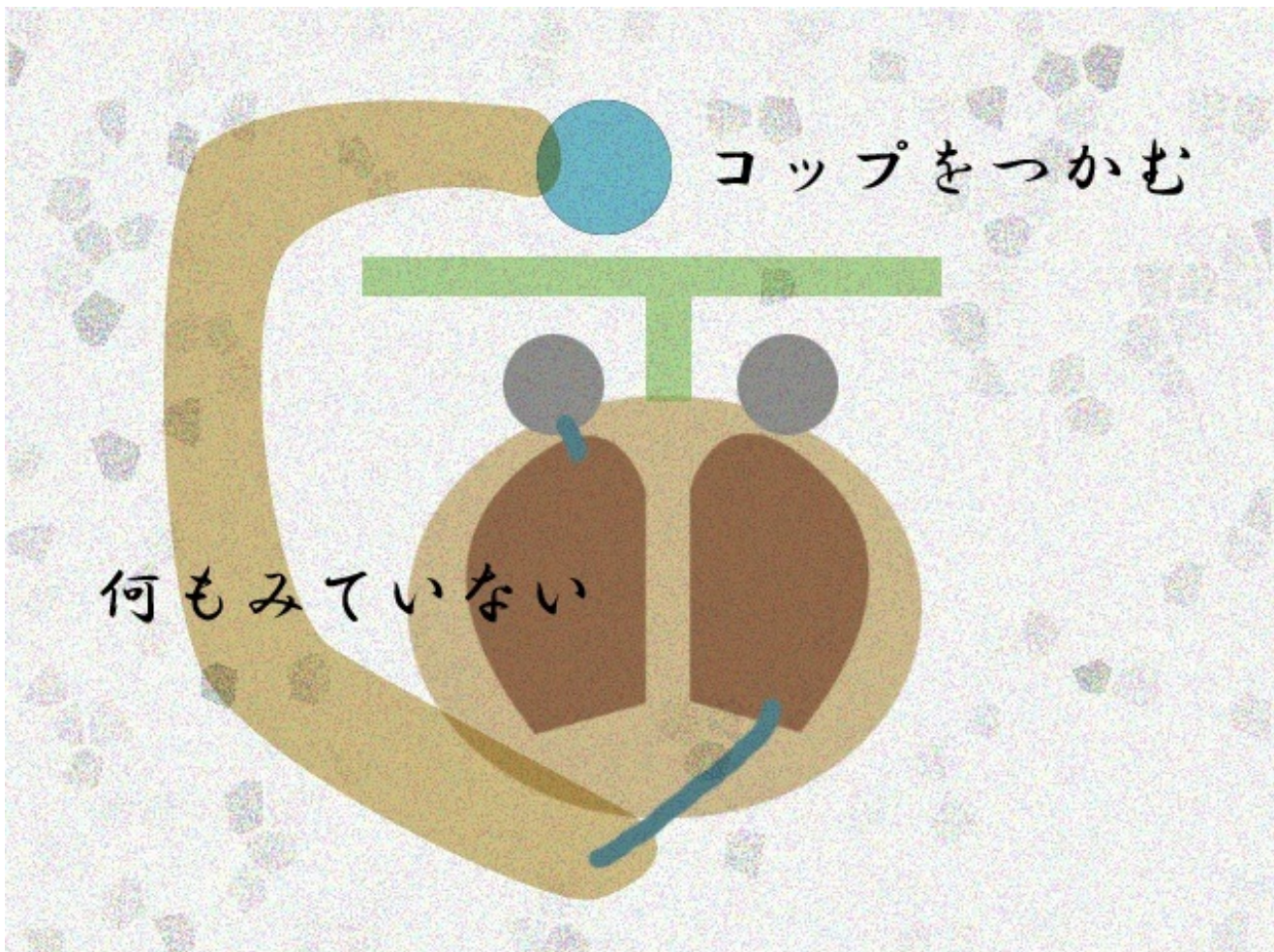
「なにもおこらなかった」

はあ！？ 脳いじって何もなかったっての！？

「——いやいやいやいや」

「そこで、本当になにもおきてないのか実験してみた」

さきほどの絵に眼球が加わり、スクリーンと両手も参戦した。



「.....さきについておくと、右眼と右脳、左眼と左脳は直結してる」

点線やら、文字やらが描きこまれていく。

「左手——ちなみに右脳が支配する手——で、いまみたものを、手に取ってくださいという。すると、被験者は、手探りでコップの形をしたものを選んで、手に取ることができる。.....ここまではわかるはずだ」

「うん.....まあ、いちおう」

「次に、『さっき、なにが見えましたか？ なにを取ればいいか、わかっていますか？』ときく。すると、『なにも見ませんでした。だから、なにを取ればいいかわかりません』とい

うわけだ」

「……でも、あきらかにみえてるし反応してるんだよね？」

「ああ……ちなみに逆だと結果が逆になる」

うーん？ なんだかわかるようなわからないような。脳のことを考えると至極まっとうな気はするけど……。

気がつく、部屋の扉が開いた音でシンシアがもどってきたのがわかった。

「それから興味深いのはロジャー・スペリーという精神科医がが子供に『将来なにになりたいか』を左右それぞれの耳でこたえたケース」

「どうなったの……？」

「片方は『建築士』、もう片方は『レーザー』と答えたそうだ」

……ん？ ちょっとまてよ？

「まってよ。それって僕のさっきのことと関係あるの？」

それをきいたシンシアが真昼ちゃんをみつめて首を傾げる。

「あるだろ？ ……さっきの症状となにがにってるか考えてみるんだ」

ええっと……。

「すみません、ハカセ。わかりません」

「『両目視野闘争がおきてないが、分離脳にもなってない』ということは？ ……あと“真昼ちゃん”です」

「はあ……？」

指を突き立てながら、真昼ちゃんが告げる。

「まず一つ。君の眼は“左右の世界を別々だと認識していない”」

「いや、どうしてそうなるのかわからないし」

「視界がまったく別ということは分離脳が考えられるが、人格はひとつ」

「なるほど……」

「二つ。君は世界を二つ解釈することによって、この間で物質を移動させれる」

「いや、それもなぜなのかわからない」

「右眼と右脳がリンクしている、そして左手と右脳がリンクしている。……コップをとれるが、それがなにかわからない」

あ、……さっきいったことか。

「おそらく、……わかる、という解釈を左脳がおぎなつたと考えると納得がいく」

「……ほんとに？」

「気がする。逆が可能だっていう保障もないけど」

気がするだけかい……。

「三つ……というか、元からだけ……」

「元からなに？」

「二つの世界がおなじものを並べ替えている、とシンシアがいったことを覚えてるか？」

それをきいて、戻っていたシンシアがなぜか答える。

「おお。覚えているぞ」

いや、シンシアに聞いたわけじゃないから。つーかもう泣いてないんですね。

「……………まあ、一応は」

「おそらく、二つめの物質の移動は転送してるようなものじゃない」

「………どうということ？」

「実際に物質が移動してるんじゃないで“世界に対しての観え方の近さ”みたいなものが、さっきの分離脳の原理で移動したんだろう」

うーん………あいかわらず、真昼ちゃんの説明はわかるようでわからない。

「………とりあえず、一つ試してほしいんだが」

「なにを？」

「シンシアを元にもどせるかどうか。さっきと逆の手順だ」

「ああ………なるほど」

そう聞いて、突っ立っているシンシアのほうをむくと首を反対側に傾げる。

「うむう？」

本当にもどしていいんだろうか？ そう思って右手でシンシアをつかんで引いてみたのだけど……………。

「ふぎやうっ！」

すってんころりん。挫けずにもう一回。

「にやううっん！」

すっとんころりと……………。

——結局その日、シンシアを赤い世界にもどすことはできなかった。

もちろん、事態にいちやく気がついたのは貴那崎雄也だった。

いつもどおりの《Parallel World Program》の観測。観察というよりシンシアの監視といいかえてもいい。

その着実な努力の一步一步が、日進月歩となり、目標を達成できると信じていた。

――が、シンシアが突然座標から消失した。

もちろん、そんなのは異常事態だ。測定器は死んでないことを示しているのにかかわらず、どこにもいない。

ということは？ 移送次元からなんの手段もなく元の世界にもどってきたということ？

「そんな.....」

愕然（がくぜん）と、肩をおろす。机に肘をつきながらマナーモードでメールでも送られてきたかのように震える。

喉はカラカラで、コーヒーはすっかり飲み干している。そのなか、絞りだすようにつぶやく。

「.....俺の、.....シンシアが.....」

「いや、あんたの子供じゃないし！」

と、うしろで様子を見ていた仮本優衣のツッコミがはいる。

「.....シンシアは俺が育てた」

「ちがうし！ だいたい苗字違ちがうし！」

「心は離れていても、ずっとそばにいて.....見守っていると誓ったのに！」

うつむき、きつく握りしめた拳に力が込められる。

「内容はあってますけどね？ モニターの前で観察してただけじゃないですかあなた」

「.....まるで俺がひきこもりで、毎日ゲームをでもやっているようないがかりだな」

「.....実はわかってこのコントやってませんか？」

雄也は態度を一変させておちつき、机にむき直る。

「ともかく、考えられる要因を模索してみよう。.....“俺の”シンシアのために！」

「もうツッコミませんからね？」

「よろこべ、仕事だ.....」

そんなことを全然よろこんでないようにいう。

対して、優衣にとっては少しはマシなことだという態度。長時間つたっているだけの仕事ももちろん得意だが、彼女の性格はもっとアクティブな側面を持っていた。

.....たとえば、仕事ときいてまっさきに笑顔で銃を用意したりとか。

「具体的には？」

「まず、最後にシンシアの座標が消えたあたりで彼女の搜索」

「.....“こっちの世界”で探しても意味がないのでは？」

「逆だ。むこうで消えたのだからこっちでの搜索にこそ意味がある」

「なるほど.....。了解しました」

モニターをもう一度みかえし、どこか寂しそうな顔になり、ふたたび優衣をむく。

「それから、……………例の“目薬”を本格的に市場にも流すように」

「それは製薬会社の仕事ですよ」

「知らなかったか？ 管理のほとんどは君ができるように手をうってあるんだが？」

優衣は知っていた。しかし、めんどくさかった。経済的なことはもちろん、人を動かすことよりも銃を撃つ方が気が楽だったからだ。

「……まあ、ある程度はすでに流れてますよ」

「“ある程度”じゃダメだ。……この計画は“あっちの世界”の観測者を増やさなければ成功しない」

それを聞いても優衣は、まあいいか、目薬は適当にやっておいて、そとで楽しくやろう、と考えていた。

シンシアが翌日勝手にもどっている、なんてことはなく。

さすがに同じ部屋にしておくのもアレだから、部屋はわけて寝かせておいた。昨日、眼を痛がっていたのは真昼ちゃんが「アルビノは光を調節できない」うんぬんをきいていたから知っていた。それでも少しはつらそうだった。

……なぜか真昼ちゃんも泊まっていくことになった。ちなみにシンシアとはべつの部屋。

「――ということで早朝ですが、なぜ元の世界にもどらないか聞いてもいい？」

「そっちの方が面白いからだ」

あー。いうと思ってました。ですよー、面白いですもんねー。

「こっちを“観る”には目薬でなんとかなるが、もどってからまた“観る”ことができるかわからないからな」

「それにしたって、もどらなくていいの？」

「構わん。お前がもどせないんだから、こっちを調べられる機会が減るだろう？」

まあ、それはそうなんだけど……。

「それよりも……シンシアみていられる人間がないけど、大丈夫なのか？」

うっ、と。イタいところを突かれた。

こっちで一人でお留守番させとくのか、どうしようか。まだ少し悩んでる。そう思ってシンシアがいる部屋にはいる。

「すぴー……。すう～。すぴー……」

けっこうぐっすり寝ている。実は何歳だこの娘。

「おいていっても大丈夫かなあ……？」

「俺からはみえないから、なんともいえないぞ？」

だよなあー……。

おいていっても大丈夫かな？

――ということで、登校してしまいました。

学生の本分は勉強らしいです。つまり、学校へくるのは当然なんですね。はい。

別におこすのが面倒だったりとかではありませんよ？

ほら、ジェンダー的な問題を無視してるわけではないので、そうしたまでですよ。

おこした後も説明とかしなきゃいけないからな――、それもメンドクサイな――とか、ハハハ、そんなこと思ってませんって。ハハハ……。

晴天をまっぴたつに切り刻む、右の空はあいかわらず赤い。

左側には、群れる学生たちが、北へ昇るようについてくる。あるいは追いこす。その光景はいつもとかわらない。なんの変哲もない。

が、変化があるとしたら右側なわけで――

「……なんで、戻らないのについてくるのさ……？」

僕は隣にいる（ただし、ほかの人には見えない）真昼ちゃんに、周りにきこえないようこっそり喋る。

「とりあえず、“こっちの世界”をみてから、学校には一度も行ってないからな」

いま気がついたが、真昼ちゃんはちゃんと“観る”ことによる効果だと考えてるらしい。僕は第三者的立場だから“来る”と感じてしまうけど。

授業がはじまる中、真昼ちゃんはずっとウロウロしていた。気が散るんでやめていただきたいが、とめても無駄なんだろうなあ……。

「窓ガラスをバットで全部わっても戻るかな？」

きくなよ！ 授業中だよ！ そして今すぐやるのは絶対にやめていただきたい。

「……夜中とかに……」

歌の歌詞かなんかですか……。どっちにしろやらないでほしい……。

その後も真昼ちゃんは、理科の実験中に器具が突然あらわれないことや、体育でサッカーボールが勝手に跳ねないことを観察していた。

いや、つまりそれ、なにもやってないじゃん！

四時限目もおわり、いつもどおり階段にやってくる。狂ったような陽光がさす踊り場。……なんか、真昼ちゃんは盗んだパンですでに用意していた。

「真昼ちゃん……」

「ひひふふな。っんぐ。こうみえて反省してるんだ」

どこがだあっ！ しっかりと食べてるじゃないかっ！ あとその牛乳は逆にどうして手に入れたっ！

僕のつぶやきを聞いて、なにか勘違いしたらしい臯がささやく。

「そんなに心配しなくても、あいつは図太くやっていると思うけど？」

いや、まさにその“図太さ”で、「おい、ちょっと、これ、どうしたらいいんだ、なう」なんですけど……？

「そういえば……真昼だけじゃないらしいよ。消えたの」

「えっと。例の認識消失？」

「認識消失……。いい響きね……」

「いや、感心するのはそこではなくてね？」

「なんか最近、増えてるらしいわ……消えるのが」

増えてるのか消えてるのか。

消えるのはおそらく例の“目薬”が売られてるからなんだろう。でも、考えてみればあの“目薬”は誰か——それこそシンシアのいう“クライアント”が——作為的につくってるんじゃない？ それともなにかの偶然がおこっていることなのか？

つい、ゆっくり訝しげな眼を解かずに顔をあげるが、臯は踊り場から校庭を睥睨（へいげい）していた。

「……なにあれ？」

窓から下をのぞく。ちいさいなにかが動いてい、って。シ……シンシアきとるううううう！

えっ、なんでなんで来てるの？ とうかさニーキングスキル高いですねシンシア大先生。

いや、ストーキングだっけ？ ……ってそうじゃないよ。

とりあえず保護しないとマズいんじゃないか？ そう考えた表情筋を固定して臯のほうにむく

「.....そうね。.....追いかけてみますか」

臯さん顔色を読むのうまいっスね。

シンシアは西世津戸高校の学生たちの視線、もとい死線ををかいくぐって進んでいた。彼女なら試合のアタッカーから偉大なスパイになんでもなれるだろう。

進行方向は北側の棟。写真部などの文化部の部室がある場所。

「……よくここまでかいくぐりましたねえ？ 宇和さん？」

「ちょっと、これはチートでしょ？ いくらなんでも周りが気がつかないよ……」

ついたさきは窮理研究部。廃部寸前かと思いきや真昼ちゃんが管理している、……らしい部活である。

部室前にでっかく『35.3km』という文字が書いてあるのは「九里」と「窮理」をかけてるからだ。ちなみに「窮理」とは物事の道理・法則をあきらかにすること。つまり理科とか科学全般のことらしい。実に真昼ちゃんっぽいセンス。

「これって“かくれんぼ”っていいのかな？」

「もう既に“オニごっこ”なんてものじゃないわね」

躊躇（ちゅうちょ）なく進むシンシア。そこは写真部の暗室みたいに闇でおおわれていた。廃材おき場と書斎を足して割ったような部屋。

昼下がりにもかかわらず、差し込むひざしが黄昏のよう。その光をさえぎり、シンシアが影を落とす。黒一色のなか白い彼女は、説明がなかったら完全に幽霊だ。

シンシアが振りかえって悲鳴を上げなかったのは、もちろん彼女を知っているから。

意外にも、皐はありふれたテレビ・コマーシャルでもみるようにシンシアを眺めていた。

刹那、シンシアの名前をよびそうになる。いや、それだと皐にいろいろ聞かれてマズいか――

。

「――おお。カタギじゃないか」

名前いっちゃったよ、おい……………。

そのとき、急に走った僕を追ってきたらしい真昼ちゃんが右眼にスライドイン。

「カタギ。……なぜ、窮理研究部なのか……？」

いや、そんな哲学的なことをいわれても。こちらとしてもタイミングがですね。

皐はこっちをむいて、右手を促し首を傾げる。って、あれ？ さっきから、なんか皐にとってさもこんな現象が当然かのような反応。つられてシンシアも首をまげる。

「……もしかして、皐さんには全てお見通しだったりするの？」

しまいに僕も首をかしぐことになった。

「追ってたときから知ってたわよ。その子について説明して」

それが一番説明しにくいんだけどなあ。

「……じゃあ、そのまえに。どうしてシンシアは窮理研究部になんかきたのさ？」

「キュウリ？ うまくなさそうだな」

存在しない味を想像して、シンシアは逆向きに首をかたむける。

「いや、そうじゃなくて。どうしてここに？」

「それが、まっひーのにおいを追ってきたらここにたどりついた」

シンシア大先生の嗅覚すげええええええ！ 犬か。チワワかあなたは。

「ねえ、まっひーって誰？」

「えっと、それはシンシアが真昼ちゃ、……あ」

しまった。そう思って横目（もっぱら右だけ）で真昼ちゃんに視線を向けた。

「うん？　なんで真昼が関係するの？」

右眼の先の真昼ちゃんが、僕の言葉をきいてから腕をくむ。そして、考えから頭をあげて告げる。

「いいぞ、カタギ。話してやれ」

あいもかわらずこの男にはちょっとした一言で状況が読めてしまうらしい。

それを聞いてもどうしようか返答に困っていると、皐は僕のみつめる先を視線でおう。

「……実は、そこに真昼ちゃんがいる。といたら？」

信じてもらえるか、といたらまったくそんなことはない。それでも宇和皐は理解できた、という表情に変わって何度も頷（うなづ）きながらつぶやく。

「ああ。なるほど……」

皐さん。ほんと顔色を読むのうまいっすスね。

シンシアはお座りと命令、したわけではなく。机に乗っかり脚をブラブラさせている。

「それでー」

左眼には、後ろ手に机をとらえ、スポットライトを浴びるモデルのポーズのごとき臯。

「何が起きてるか知りたいってことだよな？」

口答で真昼ちゃんにいいながら、臯に答えようかと思っていると、青空真昼が右眼から返答した。ちょっとしたサラウンド感覚。

「ちょっと待ってろ……」

真昼ちゃんは胸ポケットの生徒手帳をとりだし、後ろのほうのメモにカリカリ書く。

「ああ、臯。なんていうか、その、ちょっと待って」

「え？ は？ なに？ 待つってなにを？」

机の臯との反対側で、真昼ちゃんがすばやく書き終えた。

「お前がこれを直接“観る”方がはやい」

言い終わると同時に、紙を何枚かちぎって渡してくる。確かに信じさせるにはスマートだろう。目の前に突然物があらわれるのだから。

「あと、シンシアにいておいてくれ。……“真昼ちゃん”です」

あー、この人あくまでこっちに来たくないんだー。わかりやすい。

「……………それでは、真昼ちゃんのご要望におこたえして」

臯がキョトンとした表情になる。きっと霊能力者が真昼ちゃんの魂を憑依（ひょうい）させようとしてるかのようにつるんだらう。などと思いながら、ちいさな紙束を“左手”でつかみ—————引く。

——所有権は右から左に受け継がれる——観測し直した——観測が変わった——。

もしかしたら失敗するかとも考えたけど、それは杞憂に終わる。

いきなり左腕で何もない空間から物をだしても、これだと底の知れた手品だ。だが、臯はだされたメモを何の疑いもなくとりあげてじっくり読む。

「う～ん。……なんとなくわかった、……かも」

まあ、確かにわかりにくい概念かも。

「それにしても、まったく疑わないね」

「真昼がらみだからね。こういうことはありそうじゃない？」

人をまるで超常現象のデパートみたいにおっしゃる。いまその隣にいますからね？

ポンっと、グーをパーで垂直に受ける音。後光に電球でも出そうな感じで臯が言う。

「もしかして、真昼の認識がなくなってるのも関係ありそう？」

「ああ、……そういわれてみると、そうかも」

それを聞いて、反対側の真昼ちゃんがいう。

「なにがそうなんだ？」

「いや、なんていうのかな……赤くない方だと、みんな真昼ちゃんのことを覚えていないんだ」

「まあ、私はなぜか覚えてるけどね」

それも確かに不思議なんだよなあ。

「……………面白い」

なんていうかここまでくると、逆に真昼ちゃんにとってつまらないことはなにか知りたい。

「だが、逆に当然ともいえなくもない」

「どういうこと？」

「つまり、その状況は観測者同士の関係性をそのまま示してる」

「そう簡単に知っている人間を忘れてしまうものなの？」

「例の“目薬”は『“こっちの世界”が観えてる人間』というものを動かしてる」

人差し指を教鞭のように振りながら彼は続ける。

「ももとの数列から“1”を消して“0”にしている。知覚できないものは存在しないものと同義なんだ」

「知覚できないものは存在しないものと同義……………」

「あっ、そういうこと……かも？」

僕の独り言をきいた皐が唐突に声をあげた。つかつかとシンシアの近くにより肩を叩く。そして二人ともこちらを向く。

「この子、さっきまであんな——」

くいっくいとシンシアが皐の袖を引く。

「——この子ではないぞ。シンシアだ」

「うん？ シンシアっていうのね？」

なんだかシンシアは先日のよりも人懐っこい様子に見える。

「ああ、名前はなんていう？」

「宇和皐よ」

「さつきというのか。では“さっちー”だな」

あーっと、皐に妙なあだ名はレッドカードだが。どうなんだ？

「うん。じゃあ“さっちー”ね」

どうやらセーフだったらしい。まあ怒っても困るけど。

「話をもどすと。シンシアがあんなに走ってたのに、誰にも見つかってなかったでしょ？」

「あー。確かに」

右から観察している真昼ちゃんが言う。

「何が、確かになんだ？」

「真昼ちゃんみたいなことが、さっきシンシアでも起きてた」

「なるほど。興味深い」

「いや、いまだに理解できてないんですけど」

そう言うと真昼ちゃんはすぐに棚を指さす。窮理研究部の集大成ともいえる本の群れ。

「たとえばこの瞬間に、本が一冊表紙の色を変えても、それを確認するのに時間がかかるだろ？」

」

地味な色のたち並ぶ本のなか、どこになにが入ってるかは言われないとわかりそうもない。
「もともと“こっちの世界”が、さもなにもなさそうなところに、並べ替えでなにかを示す技術なんだ。だから“そっちの世界”のシンシアにもそれがおこってる」

シンシアの方を向く。ただでさえ目立つ異端な色もまったくわからないのか……。

「二次元なんてただの絵。三次元はタンパク質の集まりということだ」

……いや、それ言ったら怒る人がでるだろうに。

——と、そんなところで午後の予鈴が鳴った。

お昼の時間をめいっぱい使ったから、午後の授業に遅れた。とはいえそれほど重要なこととも思えないからいいんだけど。

シンシアは見つからないとはいえ、学校でうろつかれるとなにかとこまる。とりあえず窮理研究部で待機してもらうことにした。そこら辺は遅刻もひっくるめて、皐の魔法のテクニックでどうにかなるらしい。ウワサのチカラってスゴイ！

午後二時間のなかでは主に『シンシアをどうするか』と『目薬はどういったものか』を考えていた。そして、どちらのも『“くらいあん”の目的はなににか』にたどりつく。

どっちも皐と真昼ちゃんの力を借りればどうにかなりそうだけど、どうしようか。と考えてて午後の授業は終わった。

授業後になったことを知らせるチャイムが鳴ると、ふたたび窮理研究部を目指した。

昼ですら薄暗かったのだから、日が暮れようとするこの時間はさらに見通しが悪い。

遮光カーテン同士の間隙を、下から引き裂く緋色がさしこむ。この時間帯の造形物はみていると落ち着く。どっちも似たような色だからだ。

シンシアはどこから持ち出したのか、両目の色の違うクマのぬいぐるみを抱えていた。皮肉にも僕と同じカラーバリエーションである。そんなものどこにあった？ この部室か？

まさか、とも思うけど。なんか、なさそうでありそうなので聞かない。皐の持ち物という可能性も捨てきれないからだ。……というか可能性がこい。

真昼ちゃんにいたっては、どうやらずっとここに居たらしい。まあ、それ以外にやることなんかないんだろう。本を読んだり、紙に何か書いてまとめていた。

ほどなくして皐も部屋にやってくる。昼休みとさほど変わらないタイミングである。一応、授業は受けてたらしい。シンシアが周りから認識されないから、安心してしまったのかもしれない。

。

「……授業中もメモを読んでいたのだけれど。うーんと、たぶん理解はできたと思う」

昼に“引いた”メモのことだろう。チラリとみた感じでは、目薬から事態発生メカニズムが一枚をワン・セクションとして書かれてたはずだ。

午後に考えていた目薬やらクライアントのことを聞こうかどうかいよいよどむ。すると、真昼ちゃんが僕の肩を叩いて紙を手渡してくる。

「おい、カタギ。……これを皐に」

「えっ？ あ、うん」

の視界内物体移動現象をしてくれとのご要望だ。だんだん慣れてきた気もする。さすがにこれは僕にしかできない。コピー用紙サイズに、なにやら色々書かれた紙を“左手”でつかみ————引いた。

——観測し直した——右から左に——観測が変わった——。

もしかしたらコツをつかんできたのかもしれない。移動するときには眼というか、身体が感じる

ピクっとした妙な感覚がなくなってきた。……なんだか「人間やめました」とでもいえそうで未
恐ろしいが……。

右眼の世界からとりだした用紙を臯に渡す。最初は細まっていた両目がじょじょに開かれて
いく。口元には笑みがこぼれていた。

「……………なるほど。……面白そうね」

なんだかここに真昼ちゃんに感化された人がいる。

「なに？ 面白いことなのか？」

いや、シンシアが楽しめそうなことじゃない気がする。どっちかっていうと、そう……

「……もしかして、僕が相談しようと思ってたこと？」

真昼ちゃんがニシシとでも言いそうな顔になる。対して臯は斜め上に視線をむける。

「うーん、そうかも」

真昼ちゃんは行動が早ないあ。いや、二時間も部屋にこもってるのはさすがに暇だったのかも

。

「目薬の出所をたどってシンシアを親元に帰そうとか思ってる？」

「まあ、近い感じかな……？」

「それじゃあ保護者の同意も得たし、行動開始ね」

それを聞いて、シンシアが首をかしげて臯みつめる。

「だれがだれの保護者なんだ？」

僕は知らない間にシンシアの保護者だったのか……………。

「なにをやる気なの……？」

「うーんと、『地理的プロファイリング』による簡単な“目薬”のホットゾーン解析。あと簡単
な『データマイニング』もしてみるかな」

「ちっとも簡単に聞こえないんですが。なんだかウワサとは思えない」

「そんなことないわよ？ ウワサの基本は統計学よ」

そんな話初めてきいた気がします？ どの領土のローカル・ルールなんだ。

「それで、……具体的にはどうするの？」

「まず『地理的プロファイリング』。元々は連続殺人犯の行動分析から、そいつの住処（すみか）
を推測する手法」



「ずいぶん飛躍するように思えるけど？」

「それほどでもないのよ。例えば、スプリンクラーで撒かれた水の位置情報から、噴出口の位置を特定するわけよ」

「それで、えっと、ホットゾーンって？」

「ようは水の範囲ね。二人の目薬の種類から店舗を特定——さらに店舗から流出先も調べて——
どういふ組織がつくってるかわかる」

「それで、えっと。もう一つはなんだっけ？」

「『データマイニング』ね。データの集合から法則性とかルールを発見するの」

紙を眺めながら皐が人差し指をふる。

「最近だと……スーパーでお客の買ったものを分析したら“紙おむつを買う人はビールを買うことが多い”という傾向がでるの」

「……それが何かの役に立つの？」

「そのデータを逆算するなら、販売側の目的もみえてくるはずでしょう？」

指で床をトントンしながら続ける。

「その“目薬”を買う人にどんな人が多いかを調べれば、流出先の目的にもつながるはず」

「……なるほど。あ、っでもその統計をそもそもどう集めるの」

「……ふふふ。……主婦たちや女子高生たちを舐めないでほしいわ。……ふふふ」

もはや皐の“ウワサ”の技術的な敷居は常人を超えてる気がする。そういったことはやはり彼女が適任なんだろう。でもその、無駄に精錬された無駄のない無駄な知識を、数学とかで生かしてほ

しいな。

技術的な部分で二人を手伝うのは断念した。っつーかムリでした。データをそろえるにも僕では時間がかかりすぎるから専門家に任せるしかない。阜の講座のあとは、帰り道で周りの女性がみんな敵にみえそうな感覚を覚えた。左側だけでよかったとかよくなかったとか。

存外、遅くなってしまって夜の帳（とばり）は落ち始めていた。もう遅くなるからシンシアを家に連れて帰らないといけない。……謎の親心が働いてる僕はもう保護者かもしれない。

“あっちの世界”でもそうだが、シンシアの肌は目立つ。紅白の印象も強いが、いま歩いているクロとシロのインパクトも彼女の持ち味の一つだろう。

ここまで白いと、普通の日本人も黄色人種なのだなと再確認してしまう。これが他人からまったく認識されないというのは、不思議だ。

――んで。帰宅したのはいいのだけど。

「シンシアが居座ってるのも失礼だから。今日は夕食をつくってやろう」

などと上から目線でおっしゃる。いや、心配極まりないんですが。なぜ僕がつくれないだろうと推測するような顔なんだ。……いや、間違ってもないかな。

「『ひとりでできるもん』みてたからな」

「なおさら心配だ、っていうか実は何歳だ？」

それだけ言い残してシンシアは台所にかけこんでしまう。

……なんかドタンバタンする音がきこえる。

ドンガラガッシャーん！ ジー！ ジー！ ウィーン！

なんかこれ料理って音じゃないよ？ どっちかっていうと発明してる雰囲気なきこえるよ？

怖くて入れない。開けたら鉄板とか飛んでくるんじゃないだろうか……？

「できたー」

はえーよ。三分ぐらいしか経ってないよ。



　　といって、シンシアが机に並べた料理は暗黒物質だった。どうみても食べものではない。
「ところで、これはなに？」
「よくできてるだろう？ 和風料理だ」
　　ねえ、和風の“和”ってなごむって読みませんでした？ この場にふさわしい表現とかじゃないんじゃないっすかねえ？
　　そう思ったとたん、絶妙なコントラストを奏でなざる、赤い茶碗の中にある黒いタールのような液体が泡だち、「ゴポッ」と音を立てる。
「ワァァー！ フウウー！」
「そう、和風だ」
「なにこれ。つーかなにこれ？ 硫黄の匂いがしてるんですけど」
「そんなの、味噌汁に決まってるだろう？」
「じゃあ浮いてる黄色いツブツブなに？」
「ネギだ」
「腐ってやがる！ 遅すぎたんだ！」
「あ、納豆って腐ってるんだってな。初めて知ったよ。だから混ぜた」
「混ぜるなキケン！ じゃあするってえとこれは」
「ご飯もわからないのか？」
　　へえ、そう。でんぷんってこんな色になるんだ。青色だよ、ふしぎー。大自然の力ってすごいねー。
「ということで“喰え”」
「……………え？」

「だから、喰え。そりゃあ、ちょっとはミタメが悪いかもしれないが.....頑張ってつくったんだ.....。食べてみてほしい」

「.....」

そうだよ、なに考えてるんだ。彼女が精神誠意こめてつくったんだ。美味しくないわけないだろう？ この青色だってほら自然界にないお米の色だけど、きっとその、ブルーハワイとかいろいろあるだろ？

意を決して、一番安全そうなお飯（カラー：コバルトブルー）から試食する。その間中、シンシアは固唾をのんでこちらをじっとみつめている。

その視線から放たれるビームとかで箸が折れる。.....そんなことはなかった。

――ぱくっ

あれ？なぜだろう？ 哀しくないのに涙がでちゃう。

「そうか、泣くほど美味かったか」

「いや、これは食べた分の塩化ナトリウムが排出されてるだけだよ。はは.....」

「エンカだけに、『コブシがきいてうまい』ということか」

――うまくねえよ。

かくして、シンシアのドキドキ三分クッキングは終わった。

それと同時刻。仮本優衣は朱縞模の家の明かりをみあげていた。

「目標消失の座標に到着しました」

とって、連絡できないように電池をぬく。雄也による俺の娘談義をきいていたらたまらない。それに、いまからは戦闘を起こす気満々なものだから。その途中で電話がかかってきても困る。

……しかし、それにしても妙だ。そもそも双葉慎詩亜には単独の住居を与えられているから、こんなところまでくる必要性がない。また、消失（ロスト）する理由もいまだ不明。

逆に観測者の数を増やすのなら簡単だ。“目薬”を使えば手軽に異世界に迷い込める。製造は上々で、今後もその人数は爆発的に増えるはずだ。

もしくは、その世界に迷い込んだ人間のアプローチだろうか？ いや、それでも……これほどの短期間に何か変化がおこりえるものだろうか？

見つけたのは一般的な家。中からは談笑が響く。照明をさえぎる陰がないか探る。どうやら裏手の台所に人がいるらしい。敷地内に入って、音に注目する。

耳をとぎすませば経験から、あるいは感覚的に、壁越しでも対象がどういう人物かわかる。

……対象はここにいる。理由はわからないが、ともかく彼女をつれ戻せば一つの仕事が終わる。そう思って、気軽な感覚で銃を構える。

——ここでチャイムを鳴らしたらギャグだろうか？

シンシアと一緒に夕食の片付けをすることになった。食器をだしたはいいけど元の位置まで覚えていないとおっしゃる。あれだけメカニカルな音をたてたのに、工事用機材はどこにもなかった。不思議だ！ そんなことしか考えてなかった。

だから、瞬間。ガラスの割れた音をきいてもそれほど驚かなかった。

きっとシンシアがなにか落としたんだろう、とか、そんなとこだろう。そう思ったんだ。

.....居間の窓のヒビワレの外から、女がこちらを覗いていた。

これだけでも充分ホラーな状態だ。夜中に見知らぬ女性がポーっとこちらを眺めている。いや、あまつさえ家宅侵入しようとしている。庭にはいま、くせ者がいる。

それでも悲鳴をあげずにいられたのは、シンシアという経験則があったからだ。幽霊対策マニュアルとして導入してもいいかもしれない。ハハハ.....。――ちげーよ。

めをひく鉄の塊。灰色、いやこれがガンメタルという色なのだろう。女が持っているものはモデルガンではないな。.....あるいは聞いてみるか？ イズ、ディス、ア、モデルガン？ とか言えればいいのか？

「おっ、.....目標、はっけん.....？」

長い髪がたなびくよう揺れていた。瞳は不思議なものをみるようにこちらを、いやその先のシンシアをみていた。

「でも、どうして.....？」

ひとつの窓ガラスわっおいて考え事されてもこまる。

とはいえ、目線でなにが目的かは察した。シンシアだ。

別段シンシアは取り乱すこともなく、眠たげな目をたずさえて相手の女性をみていた。

「とうとう来たのか.....」

その台詞は年齢にまったくにあわず。どちらかといえば死期でも悟った初老のような響きを持っていた。怯えなどいっさいない態度。

ふりむけばさっきの女性はすっかり居間に侵入していた。

これがシンシアのいっていた“くらいあんと”なのだろうか？ そうだとして、夜中に銃を持って乱入してくるのがマトモだとはとても思えない。

考えもなしに、とっさにシンシアの手を引く。それと同時に、居間の照明をおとす。玄関まで一気に走り抜ける。

早く脱出したかったけど、すぐそこで止まる。シンシアが僕の腕をひっぱって止めている。

「.....くつ」

靴なんて後でもいいじゃないか。とは思いつつも、いまからどれぐらいの逃走距離を稼ぐのかわからない。

「走りながら履いて！」

つま先だけ挿してシンシアを走らせる。僕もかかとを潰したかたちで外にでる。大変行儀がわるいが、いたしかたない。

考えられそうなことは少ない。とにかく走って、走って走って……逃げよう。線路を下り南から海沿いを。必要なら真昼ちゃんや皐に連絡を入れよう。携帯はあるか？ よしある。それだけ瞬時に確認して先を急ぐ。

「どこに逃げても無駄だというのに……」

後ろでに女がそうつぶやいたのが、きこえた気がした。

当てにならない右眼で見渡すのはやめて、左側で広く見渡しながら走る。

できるだけ人混みに紛れるべきかと、考えてやめる。なにせ登場の乗っけから銃を構えてくる相手だから、そこで流血沙汰になるのは気が引ける。助けを求めても、事情を説明する手間すら省きたい。

海沿いの経路まで、いちおう信号がすくなく逃げやすそうなルートを選んだつもりだ。

逆にいえば人通りはないが、あとちょっと先にいけば住宅地にでれる。土地勘がない僕でも、閑静な場所で乱射などはされないはずだ、という考えが浮かぶ。

埠頭までやってこれた辺りで、シンシアの足取りが重くなる。この前、真昼ちゃんに追いかけられたときだってもっと走れたら？

いや、シンシアを責める気にもなれない。なにせ追いかけているのは彼女なのだ。

「……すこし……やすむ？」

二人で壁によりかかる。てんでテンポのあつてない、ぜーぜーとはーはーの低音二重奏が漏れる。僕がサボっている体育のレベルと、あれだけ走ってたシンシアの体力は等価値らしい。

潮風が涼しくて心地よかった。できるだけ家から離れなかったのだから、海くさいと感じた。高校は山側にあるから、ここまで来ること自体が久しぶりなのだ。

「……なんで逃げたんだ……？」

「なんでって、……それは」

いや、あの状況だと逃げるしか選択肢ないだろ？ そう考えて壁際に添いながら斜め上の虚空を眺めていた。

「“ユイユイ”はたぶん、シンシアをむかええに來ただけだ。ああみえても、けっこう優しいやつなのだぞ。たぶん話せばなんとかなった」

いや、優しいというにはまがりなりにも相当ブッソウなもの持ってましたけど。あれかな？ 精分の四割が優しさで出来てるとかいうのかな？ 重火器って何言語なんだろう？

「シンシアには“むこう”にしか居場所がないんだ」

「そんなこと……ないだろ」

振り向けば。夜空を仰ぎみていたシンシアの顔が、しゅんとうなだれる。

「ほら、たとえば真昼ちゃんとか臯だっているだろ？」

真昼ちゃんは確かに“むこう”で待機している。それでも彼はあつたときからシンシアの居場所やあり方を考えているはず。それに臯なんかも、シンシアにあだ名をつけられたってイヤな顔もみせず接していたじゃないか。

「……いや、たしかに“まっひー”と“さっちー”には世話になった。だが、それとこれとは別だ」

「そんな……」

「たしかに“こっち”の生活もひさかたぶりに楽しかったぞ。だがな。やっぱりこっちはアルピノには暮らしにくい」

シンシアは先天的な白人（アルピノ）だ。それは事実で、そのことはおそらく誰にもかえられない。

「ここはシンシアの居場所ではない……」

でも、……でも……！！

「どうやら交渉成立みたいね」

思いのほかツカツカと優雅に現れたのはさっきの闖入（ちんにゅう）者だ。

「まだ、何も話してないだろ」

「そんなに睨まなくていいから。命を奪うわけでもないし」

どうやら無意志に睨んでしまったらしい。そんなこと言われても銃をしまうそぶりはまったくない。

「奪うのはシンシアってこと？」

我ながら皮肉だけは得意なようだ。

「イツ、イージー。まあ奪うなんて言い方も語弊（ごへい）があるけどね。ちょっと要件上かえしてもらっただけ」

ああ“とつてもわかり易い”（イツ、イージー）ね。なにせ僕はそれに逆らいたいときている。

「ユイユイ……」

傍らのシンシアがつぶやく。いまの迫真の状態からは想像できないほどユルいニックネーム。

「自己紹介がまだだったわね。仮本優衣よ」

そんなことを言いながら拳銃を人差し指でくるくる回す。……危ないだろ。とても自己紹介の態度とは思えない。

「……朱縞模」

自分でいうのもアレだけど、やっぱりこの名前は語るたびに違和感を覚える。

「さて、名前も名乗ったことだし。……双葉慎詩壺をかえしなさい」

「話が飛びすぎだろ……。せめて事情の説明とかないのかよ」

それに、まるでシンシアをモノみたいな扱いでよぶ。

「ゴメンっ！ あたしも難しいことよくわからないから説明できないの」

拳銃を人差し指で維持しながら、テヘッと笑いながら手をほおに当てる。近年の悪役でも稀にみる、ふざけた反応だ。

「十秒あげるから考えていいわよ」

まつ時間が与えられるのか、それなら――

「時間がたったら脚を撃つけどね」



……………え……………？

「までユイユイ。そんなことしなくてもシンシアは戻るぞ」

まさか、こんなところで撃つ気なのか？ 刹那、ももから出血してるところをシンシアを無理やり連れてかれるところを想像して固まってしまう。

僕はシンシアの腕をつかんだまま硬直していた。

「おいカタギ！ 何をしている。は一な一せ！」

「……な一な。ろーく……」

しまった、完全に出遅れた。といっても相手は軽く構えているから逃げ出しても撃たれるだろう。逃げれば……いや、あたりどころが悪くてはこまる。はやくなんとかしないと、とは思いつつも、打開策はとっさに浮かばない。

どうする？ いっそシンシアを渡す。ちがう、なにを考えているんだ！

「おい、ユイユイ。さすがにこれはやりすぎだぞ！ いい！ シンシアがもどる」

なさけなくも自分の脚とシンシアを天秤にかけて測っていた。だが、揺れた先にはシンシアが重く傾く。

勝った。脚を守ることなんかより、シンシアを護ることのほうが大事だと気付いた。

「……よーん。さーん……」

だが、気がついたからといってなんだろう？ 残りはたったのあと三秒しかない。三秒ではなにもかわらない。なにも変えられない。

「いーち。ゼロ！」

とたんに嬉しそうな響きのカウントダウンが終わる。

————バンっ！ と。乾いた音が響く。朱縞模は間違いなく、撃たれた。

僕は、……次に襲いくるであろう痛みにきつく瞳をとじる。とっさに、せめてシンシアにはあたらないようにと突き飛ばしていた。

走馬灯は、意外にも巻き起こらず。そりゃあ脚だからか、と、伸びる時間のうねりを感じた。

.....こんな状況においても。やっぱり朱縞模は臆病だった。
ただし、逃げなかった。その一点だけがちがった。
臆病ゆえに、撃たれた瞬間。彼は無意識に眼を閉じたのだ。

名前は本質を示すという。

模（かたぎ）とは、模様を彫刻した板。その形を布や紙に刷って染めつけるのに用いる。あるいは、模（も）する。ある形に似せてつくる。まねる。また、ひきうつして書く。そういう意味の言葉。

つまり、もともとなにかの事物があることが前提になっている。

だったら。もし、彼が“一方の世界の観測を放棄”したのならどうなるのだろうか？

.....左眼を先に閉じた。それがまず第一の奇跡。

「……………なん、……で」

まず一つめの奇跡は訪れた。朱縞模様は“倒れなかった”。

優衣の絞り出すようなうめき、あるいはつぶやき。

……あれ？ なにかおきたのか？ いや、間違いなく銃声は轟きわたった。……のだからこそ僕の脚部のどちらかは痛みを訴え出血しているべきではないのか？

もしかして彼女がワザと外したのだろうか？ 外れた？ ……それこそありえない。この至近距離とっていい間隔で銃のプロがたかだか少年に狙いを定めて撃ち漏らすなどあるはずがない

。

……ならば、なにか。そう考えて背後を顧（かえり）みる。

弾痕は存在した。

もし僕の脚を貫通したのならそれを否定はできない。しかしながら脚は健在だ。傷ひとつない

。

それなら何が起こったのか？ いや、僕はなにをした？ なにもしていない。いやちがう……眼を閉じた。

それだけ？ それだけだ。もしそれだけなら？

弾痕をふりかえって考える。我ながらバカな考えだなあと、思考停止しかけてふたたび考える。まさにそれしか考えられそうにない。真昼ちゃんが言った専門用語はなんだったか。

「そうだ……『脳分割問題』だ……」

呟いて思い出していた。そして、なにがおこったか悟った。

そうだ、『脳分割問題』あるいは『分離脳』だ。

真昼ちゃんが脳と手を中心に話を展開したから、すっかり間違えていた。

まず、“赤い世界”の見方がそもそも人間原理的な考え方であること。そして、両方の世界とも本質的には同じであること。でも、シンシアや真昼ちゃんのように赤い世界にしか存在していない場合もある。

だから何度もシンシアを戻そうとしても失敗したんだ。“左手”で引くことは確かに脳の仕組みを考えれば納得はいく。けど本質とは関係ない。

最初、僕はシンシアを視界に入れていなかった。まるで“赤い世界”に居ないかのようにふるまっていたからだ。

つまり、観測していない世界に観測者は属さない。そして、観測者がいる世界のなかで所有する事物が存在しうる。

.....このことに気がついた、これが第二の奇跡。

なるほど。だったら簡単だ。そもそも“つかむ必要はない”。

なぜって、ようは左右どちらかの脳が物事をまちがいなくそこにあると判断すればいい。言葉にしたりつかんだり直観的になにかするんじゃない。というよりも『分離脳』ではそこに意味がないとわかる。

観るだけだ。……どちらかの眼で観るだけでいい。観測者がどちらかの世界に対象を閉じこめて移動させるんだ。

すぐさま仮本優衣という女性のシルエットをみすえる。さすがにあちらも動揺している。なにしろ絶対に命中すると信じていた弾丸がすり抜けたのだから当然だろう。一瞬だけ、弾丸通過が相手にどう“観えた”のか想像しかけてやめる。いまはそれどころではない。

脇に突き飛ばしてしまったシンシアのほうを向く。痛がってはいるが、それほどのことはいないようだ。よかった。それから再び向き直り、銃口がみえる。撃たれたら事だ。

まっさきに注目した鈍色の銃から、仮本優衣のアウトラインをなぞっていく。意識的な方向性では、紙細工を組み立てるのに似ていた。重みのあるペーパークラフトを現実から切り離そうと眼を凝らした。

形がそこに存在するかの――観る／観ない――スイッチを入れ替える。

瞳を閉じる。ただしそれは双眸（そうぼう）ではなく左眼だけだ。

とたんに訪れたのは、なんということのない違和感。シンシアのときで慣れていたのでそれほどキツくはない。まつ毛やゴミが目に入ったときのような感覚。

捕らえた。……確かに像のカタチを捕らえた。シールを剥がし、張り替えるがごとく。“赤い世界”に移動させる。ただ、そこにあると信じることによって。

原理世界での『仮本優衣』は本質を失い――観える／観えない――横並びする数列の入れ替えのように／あるいは無理やりにも引き剥がし――観えていない／観えている――対象の概念、存在あらゆることを――入れ替える／入れ替える。

「！ ちょっと、何よこれー！」

当然のことながら事情の読み込めていない目前の女性。シンシアや真昼ちゃんと違い、赤い眼ではない。……あっ、ヤベ。……まずいかも。

つい、とっさの思いつきでどうにかなると思って、シンシアのように仮本優衣を“赤い世界”に移動させた。でも、これってピンチじゃない？ 周りに人は居ないし、ヤツは銃を持ったままだ。……逆に助けを呼べない状況になってしまった。

「冗談じゃないわよー。もー、ほんとに何よこれー」

それとも、いまがチャンスなのか？ せめてシンシアに被害はないようにとしたわけだ。触れられない状態ならうまく逃がせるだろう。

が、しかし。僕自身の危険性に至ってはどちらかというが高まった気がする。どうしよう。

矛先……というか、銃口を向けられないうちに逃げおおせるだろうか？ いや、さっきとは状況が違う。今度こそ撃たれるだろう。と、さっきシンシアはどうしただろうかと見渡す。

と、そこに。……真昼ちゃんが現れた。現れたのはいいのだが……。なんかナイロン素材っぽいロープ持ってる。

んでもって、優衣の背後に忍びよる。片手でユルク円をつくり、輪の下から反対の手でヒモを引き入れる。いわゆる「引き解け結び」という、初心者でもできる輪が伸縮可能な結び方。そこから早業で、こう、スポッと捕縛。まさに捕縛。はえーよ。

「きゃっ、うっ、ちょっと。なにこれ!？」

しかし真昼ちゃんのワイルドな業（ワザ）は留まることをしらない。流れる水のような動き。勢いを殺さずに、そこから手刀で銃をおとす。

「でいっ!」

「あうっ!」

さらに、つかんでいたロープをぐっと引き、優衣がううっとあえぐ。ヒモを持つ手でそこから二重の輪を構成し互いに入れ乱れて、あら不思議。「手枷（てかせ）結び」が完成。手枷という名前のとおり、手錠のごとく罪人を引っ張っていく結びである。手早くつくれる結びではないのに、ササッとそのまま腕をかませる。

「いっちょ上がり!」

最後にキュッと引き絞り、西部劇でもみかけない逮捕のドラマがいま終わった。

「真昼ちゃん……なんで?」

ちなみにいまの“なんで”にはなんできた、どうしてロープもってる、なぜみんなその技術を別のところで生かそうしないか、云々（うんぬん）を精一杯に込めたクオリティ高い独白である。

そして、いいつつも視線は脇にうつる。シンシアは無事なようで、つかつかよって来る。

「……まったく、オンナノコをおしたおすには時と場合と順序をだな」

おい、聞いている人がいなくても誤解だ。とりあえず、顔を朱に染めないでください。それを手でせいして、真昼ちゃんに向き合う。

「ちょっと、いまここに真昼ちゃんがいるんだ」

「ぬ、人の話はさいごまで聞くべきだが……とするとそこに話が始まるのは……ぬ?」

と、パラドックスを秘めたような自己問答が開始された。

「? ということは、シンシアがそこにいるのか?」

「あ、うん」

「前もいったけど、“こっち”には他に人がいない。そんな中、走っているヤツは目立つ」

なるほど。真昼ちゃんには面白そうな感じにみえたんだろうな。

「それで、追いかけてみたら。人が突然現れたから捕縛した」

真昼ちゃん、展開読むのはえーよ。ロープの説明になってない。……いや、してほしくもないかなあ……。

「あんまり説明になってない気がするけど」

「走り方みてたら誰だって逃げてるってわかる。逃げてるとくれば追っ手をどうにかするしか

ない」

「まあ、……そうかもしれないけど」

「いざとなったら、俺が“そっち”に出ればどうにかなるわけだ」

「あ、そうか」

すっかり失念してた。僕のほうに“観える”ようにするのはできると知ってたか。

「さすがに、“こっち”に対してどうにかできるとは思ってなかったけどな」

二人で、仮本優衣の方を向く。ふん縛られた様子は捕まった怪盗のようでもある。

「それで？ どうするんだ？」

「どうするって？」

そう聞くと真昼ちゃんは、優衣の持っていた銃を手渡す。

「“こっち”は法律が適用される可能性は、いまだにない」

なんとなく、いっている内容はわかった。優衣は意外にも、なにもこたえずにこっちを見守っている。

「たしかに、彼女は危険かもしれない……」

もしかしたら、そのほうがいいのかもしれない。

「けれど……」

だけど、それではいけない気がした。なにより、シンシアの問題はそれでは解決しない。

「……………許すよ」

「あん？」

「許すよ。命までは奪わないんだろ？」

「……もう。そういうなら外してくれる？」

いや、そこまで信用はしていない。

「あ、ちなみに他には亀甲縛りできるけど、どうする？」

「「それはやめてください」」

二人で綺麗にハモった。

そのままシンシアをさておいて、事実についての話し込みをすることにした。主に真昼ちゃんが。

「……それで、結局なにがどうなってるの？」

「だーかーら。聞かれても詳しくないからこたえられないんだって」

何度か同じようにいってるから事実なのだろう。それでも、なんかはがゆい。

「場所はもうわかってるから、とりあえず行ってからつきとめよう」

「……わかってるって。なんで？ というかどうやって？」

「臯がちょっと前に位置を割りだしたっぽい」

はやっ！ これを宿題とか課題にぶつけたら青春はバッチリなのに！

「だいたい、どうやって臯と連絡とったの？」

「ネット経由なら会話できるみたいだからな」

精錬された科学はもはや奇跡を通りすぎて冗談であった。

はたして目的地は市内、というよりかなり近いところにあった。拍子抜けだ。

沿岸部の工業地区から徒歩でついたビル。看板の名称は製薬会社。うっそうとしたビルの十三階という位置取りは、秘密組織がある場所としては妙だと思う。

しかし、シンシアのことを考えてみれば当然かもしれない。辺境からここまであるいたわけでもないのだろう。

「ホントにここなの？」

と、牛飼いのように手綱をもつ方に聞いたのだけど、牛……じゃなかった。優衣が返す。

「ここよ。ダッサいわよねえ……」

どうやら構成員には不評らしい。華やかなのもどうかとおもうけど。……まあ、たしかに『株式会社キュア・ドリーム』はダサイセンスだ。

「……で、どうやって入るつもりなの？」

「まかせろ。シンシアにいい考えがある」

シンシア司令官。そのいいかたはよく失敗をまねくんですが大丈夫でしょうか？

てっきり裏口のような経路があるのか、もしくは真昼ちゃんが銃をブっぱなして突入するかと思いきや。シンシアが普通に入口を開けた。

ここまで“くらいあんと”による妨害ナシ。というかちょっとした夢すらなくなった気がする。夜遅いのに警備がザルだなあ……。右手に二人、左手にシンシア。視界では狭いのに、物理的にはそうでもないというは入り込み具合でエレベータに乗る。電源も切られていない。まるで迎えられている気すらする。

突着してまず明るいのに気がつく。この階だけ電気をつけているらしい。あれ、きたときに照明がついていた部屋はあったか？ とも思ったけど、“くらいあんと”のいる所だけしかいまの時間は使っていないのだろう。

……いやはや、製薬会社という表向きもそうだけど。なかはもっと意外だった。

パソコン数台だけが電気代を食い並ぶ、横長机。その奥に機能性のよくなさそうなグレーの事務用デスク。椅子二つ。こんだけ。たったこれだけ。あとは左から壁、入口、壁、ガラス。全面張りの透明度から夜景が見下ろせる。ロマンチックさは皆無。

居たのはひとりだけ。しかも、こんな部屋だと残業のサラリーマンにしかみえない格好の男。パソコンを背にしながら、後ろ手を机につき、深めのマグカップでコーヒーを飲んでいた。

「！ シンシアかい？ 優衣はどうした？」

「……ユウヤ。ちょっと“うよきよくせつ”？ あって“ユイユイ”はいま“観えない”」

てとて、とシンシアが僕の方から離れる。ちょっとした心もとなさを感じた。親子の感動の再開にみえる。

「そうか……ならば俺の娘になれ！」

「いやです！」

違うのか！ 父親じゃないのか！ しかも会話の脈絡がない！ あと、考えてることが真昼ちゃんと同じっぽい！

そのうえ、年上だけにそのいいかたはタチが悪いと感じてしまう。

「……それに君は？」

あ、いま気がつかれました？ ひょっとしてシンシア以外は眼中になかったのでしょうか？

さっきの会話の後だし初対面で「このロリコンめ！」といっても構いませんか？

「おお……そうだった。紹介するぞ。カタギと、“いまは観えない”が、“まっひー”だ」

彼は理解半分の顔にかわる。初めての味をゆっくり咀嚼するように下唇が動く。それでも、よく分かっていないといったところ。

「真昼ちゃん。とっても説明しづらいからきてほしいんだけど、……どうする？」

「そうだな。どうせ戻れるのなら別にいいかもな」

「……………わかった」

さきの埠頭のときと逆。右眼（というより右側）だけに“観えて”いる。ふたたび開かれたら、そこにもいるのだと頭に刷り込む。右眼を閉じる。

位相空間上の『青空真昼』および緊縛された『仮本優衣』——観えない／観える——視界の範囲の情報の連結は錯視の一部のように——観ようとし／観ようとせず——いま、そこにいる二人の像を——入れ替える／入れ替える。

もはや手でつかむ必要はない。「引く」というよりは「貼り換える」のに近い。マグネットの素材を切り、ぺたりと現実にも観えるようにしてやる。

相手にどう“観えている”のか気になっていたが、彼やシンシアの表情から察するに瞬時にあらわれるらしい。

彼はマグカップをデスク置き、そのまま机によりかかる。四十五度の角度を右にひじを組み、考えるようなポーズ。

「……実に興味深い」

真昼ちゃんが目線が殺風景な部屋を横なぎに切る。そして、自分の身体をみる。次に優衣、僕とシンシア、最後に彼にスライドして表情が緩む。

「……面白い」

みれば、彼の笑い方が真昼ちゃんと大差ない。

「「この二人、同じ人種だ」」

優衣と声が被った。

「君が誰か――はさっき“うちの娘”から聞いた――」

「いや、あんたの娘じゃないし！」

すかさず優衣が突っ込む。

「……それであんたは？」

「そうか、自己紹介か……貴那崎雄也だ」

同性の普通の名前をきくと、なぜかウラヤマしい。

「俺は青空真昼……“真昼ちゃん”です」

そして、ガシッと握手をする同類の二人。簡単に仲良くなるのであっけにとられる。さてなにから聞いたらいいのかと思っていると、真昼ちゃんがきりだす。

「んでっ……これはいったい何なんだ？」

「これ……とは？」

「この“赤い世界”の正体――あるいは、あんたがこれを創った目的」

――ん、……創った？

「真昼ちゃん、どういうこと？」

「おそらく“赤い世界”ってのは彼――雄也がなにかしようとして創ったものだ」

「そう、そのとおり。……《Parallel World Program》は俺が創ったものだ」

そういつて雄也は外の景色を眺める。下界ではなく、遠く月を仰ぐ。

「そうだな……まずはきっかけから話さねばなるまい」

……きっかけ。それはあまりにも単純明快な回答だった。

貴那崎雄也の恋人の、如月（きさらぎ）という人物が亡くなった。もともとは同じ研究をしていた人だという。不遇にも雄也には「事故があった」という情報しかわからなかった。それでも彼女の死を伝えることと、彼の落胆につながるには充分だった。

落ち込みながらも彼女が残した研究だけは続けた。それが《Parallel World Program》の前掲のプログラムだった。

このプログラムはシミュレーションとしての現実に“直接のプログラミング”ができる。

——たとえば、火をおこすでしょう。

火打ち石、マッチ、ライター、ガスバーナー、飛行機墜落から落雷までありとあらゆる「原因」が存在する。そして「結果」として炎があがる。このとき「原因」がどのようなものであっても、なにかが燃えるのは間違いない。

プログラムはその「原因」を、あるときは自然現象、またあるときは人為的な行為から呼び出して実行する。幾度もかさなった要因から最適な「結果」を実行する。

どうやって現実化させるかという、これがちょっとうさんくさい。未来予測をするモジュールと量子コンピュータだという。しかも今あるのでさえプロトタイプだそう。

……こっからは凄くわかりにかった。未来予測モジュールはいかにも単純なシュミレータ。ただし電子的差異の観測装置につながっている。電子の位置あるいは波動関数の収束、仮定の観測をそのモジュールでおこなう。量子コンピュータが未来予測モジュールを、さまざまな重ねあわせによる並列処理をし、プログラムの入力での「結果」と「確率的にもっとも“偶然”起こりえる原因」を結びつける——

「なんかちょっと信じられないなあ……」

「そうか？ ……だったら、未来予知で災害をあてようとする霊能者がいるだろ？」

「はあ……まあいるね」

「たとえば、今後絶対に避けられないだろう災害——ここらだと東海大地震——の日付をあてたヤツがいたとする」

「それでも……大体はハズレる気がする」

「ああハズレる。だが、ここで重要なのはおこりうる地震のタイミングと、どうしてはずれたかだ」

「どういうこと？」

「『地震が起こる』ということを知っていたからそこに赴（おもむ）くのをやめる人が無数にいて、『未来予知したときの状態』と地殻変動が変わって、結果的にハズレるのかもしれない」

「……うーん？」

「この場合、『結果』がいつかおこることは間違いない。でも、それまでの影響の変化でイベントの順番が入れ替わる」

「なんだか『人間原理』じみてきたね」

それを聞いて、貴那崎雄也は続ける。

「そう、その考え方に近い。そして《Parallel World Program》はそれの応用だ」

……如月のと同じ事故でシンシアの両親が死んだという。

それからシンシアをひきとり、研究を続けるうちにある仮説をたてた。このプログラムを応用すれば死んだ如月が蘇るのでは、と。

ほとんど妄想じみたものだったそれは、仕組みを考えるうちにじょじょに真実味を帯びていった。

——このプログラムは現実をシミュレーションと仮想して「結果」をひきだすのが目的だ。

もし、そうなのなら「仮想現実としての原因」を求めれば彼女が生きていた「結果」と結びつけられるかもしれない。想定された問題は二つ。一つは「原因」をどう再現するか。そして「結果」をどう導くか。

「原因」の再現は、現実と並列する演算を『ディラックの海』で処理。虚数を隔てながら別の世界を再現する。コストをかけず、現実の世界に大きな影響をあたえないためでもある。数値には「如月がいままで生きていた」というデータを代入しておく。

「結果」までどう導くか。それは観測者の数が、空間のある程度の範囲を超えればいい。『人間原理』の考え方でいけば、観ている人間が如月を観測すればそこに存在するのは間違いなくなる。そこで“目薬”がでてくる。

“目薬”の効力は比較的簡単に“観える”スイッチを変える。これもプログラムでいじってあり、現実の世界の質量の変化ではなく“観える認識”をかえる。そして観測者の数を市内で増やせば、彼女が現実化する——

「なんで、観測者の数を増やすなんてことをするのさ？」

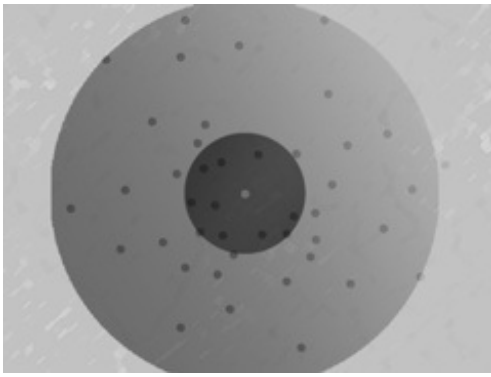
「それも『人間原理』に由来する考え方だよ。『ボールに光が当たるから認識できる』という話を覚えているか？」

えっと。最近その話を聞いた気がする。こくりと頷く。

「ならば観測者をボールの光のようなものだと思えばいい」

やはり、真昼ちゃんは胸ポケットから学生手帳をとりだす。エコだ。

目玉焼きのような図から更にいくつか丸が描かれる。右側を斜線でおおざっぱに塗りつぶす。……なんだか阜の『地理的プロファイリング』に似てる。



「この円は世津戸の全域だと思ってくれ。そして真ん中が『如月』。周りの丸が観測者。右側はわかるよな？」

「.....“赤い世界”。だよな？」

「そう。“このモデル”では少しの人間しかいない。ボールに光が当たっても、透りぬけてるから透明な状況」

目玉焼きが焦げていく。中央を含んで侵食されていく.....

「このように光のかわりに観測者を増やして、五十パーセントをこえはじめれば彼女は認識されていく」

ただのまっ黒いものができあがる。

「『人間原理』としての観測者の数を増やせば、そこに存在しなくても認識が実在を生み出すんだ」

真昼ちゃんの認識が移動したことを思い出した。きっとその逆なのだろう。

——シンシアがなぜ“あっち”入ることは大まかな真昼ちゃんの推論と彼女の強い意思があった。シンシアが必要になったあたりで、貴那崎雄也は運命を、そしてひとつの確信を得た。後から数値化できるものが、現実化できないはずはないと——。

.....以上が、のろけ話カットのダイジェスト版だ。

シンシアを道具みたいに扱っていると思ったがそうではなかった。彼、貴那崎雄也はそういう目的で動いてはなかった。

シンシアはひきとられた恩を返そうと自主的に参加したに過ぎない。幼い独り身のアルビノは生きるのが難しいのだろう。紫外線の対策や視力矯正、それに親がいないということが重なるのは、つらい。

.....それでも釈然としないものは心にちょっぴり残るけど。

「.....面白い」

例のごとく、真昼ちゃんはそうつぶやく。

「手伝いたくなるな」

「手伝うって、.....ほんとに？ 周りの人を利用してるとような相手だよ？」

ちっちちと、タンギングして指を振る。

「彼は、貴那崎雄也は他人を犠牲になどしていない」

「そんな、だって――」

「――誰も呪わず、事故の責任をなにになすり付けるわけでもなく。あるいはこの技術を世界の征服にも使わず。ほとんど独力でたったひとりの人間を救うためだからだ」

それをいわれると、いいかえしにくい。

“目薬”という点では観測者を送りこむ必要はあるけど、別に殺すわけではない。事故に対しての復讐としてなにかするのでもない。これだけの技術がありながら、それを暴力的なことに使うでもない。

「といっても、俺が手伝うなんていうのはそれが理由じゃないけどな」

「どういうこと？」

「この《Parallel World Program》はよくできてる。が、しかし――」

真昼ちゃんは雄也にむかって人差し指をむける。

「――このプログラムには重大な欠陥がある！」

「ふむ……………それはいったいどういうことかな……？」

それはそうだ、僕だって聞きたい。あれだけ綿密に設計されてるのに、それが失敗なのだとしたら……彼の想いはなんだったというのか。そして、僕とシンシアが出逢った偶然はただのミスだったのか。

「観測者の数を増やせば認識が実在化すること。それは間違いだ」

「ほう……そのどこが問題なんだい？」

そう言いながら、机によりかかるのはやめて、真摯（しんし）に向きあう。

「大問題さ。……観測者を増やしても“赤い世界”の認識する数が増えるだけ。いや、それどころか単に現実を侵食するだけだ」

「なぜそういいきれる？」

「おそらく“このモデル”では過去の一点『如月が活着ている』の数値に従って『結果』を導こうとしている」

「ああ、そうだ」

「観測者の方は『如月が死んでいる』時間に生きていた……観測の初期値としてのキーがシンシアな点が問題なんだ」

雄也は腕を組み目を閉じる。真昼ちゃんは続ける。

「シンシアが観ることで矛盾が生じる。……なぜなら、『如月が死んだ』ことがシンシアをひきとる理由だからだ」

「いや、それでも“赤い世界”はたしかに存在してるよ？」

「そりゃ存在してるさ。そして“なんにもおきない”」

「なん……にも……？」

「そうだ。“このモデル”ではシンシアがいない『原因』を導けない。だってそうだろう？ 『如月が死んだ』過去がなければいまのシンシアは存在していない」

……なんて皮肉だろうか。恋人を蘇らせる存在が、それを妨げてるなんて。振り向けば、シンシアはうつむいていた。

「じゃあ、“観る”のがシンシアじゃなかったらいいってこと？」

「そうじゃない。だって、他ならぬ——」

続く言葉を貴那崎雄也がさえぎる。

「——ああ、わかってる。プログラムした本人が『如月が死んでいる』過去を観測しているのが動機だからだ」

「えっと……それはつまり？」

「如月が死ななければ《Parallel World Program》は動かない。俺はその死をきっかけに制作し、起動したからだ……」

……そんな。そんなことって。

動機が行為の邪魔になる。精密な設計と準備が、正しいがゆえに想いを殺すのだ。

静かに、言葉が貴那崎からこぼれる。

「ならば……どうしたらいいんだ？」

「――そこで、新しいモデルを使ってみる気はないかな？」

この場に似つかわしくないぐらい、真昼ちゃん的笑顔はまったく絶えていない。

さきほどの手帳を、こんどは貴那崎に向けるようにだす。

「さっきのモデルの欠陥は、作者とシンシアが『如月の死んでいる』ことが動機になっている」

手帳のメモがめくられ、新しく書き込まれていく……。



一点から鳥の足ののように線が伸びる。Yの字から、更に棒がたさされている。過去から未来へと矢印が引かれる。

「普通、俺たちは未来が他方向に伸びているって考えてる。選択によって変化する観測結果は《Parallel World Program》でもこの構造に従ってる。だったら——」

Y字は米の字になる。分裂した過去が、ある一点に結びつく。

「無数の未来と同様に——複数の過去から偶然この現在を通ることもありうる」

「……本気で言ってるの？」

無数の過去ねえ。……ん？ 無数の、無限の可能性？

はて、こんな話をしたような、そうでもないような……？

「もちろん。そしておそらく、観測者自身はそれを知覚できない」

「でも、この考えがあつてなにか変わるの？」

「大間違いだ。《Parallel World Program》の仕組みが例の“プログラム”に由来するなら、観測者が貴那崎雄也と関係ない人物なら問題ない」

「“プログラム”は彼がつくったはずでしょ？」

「それも、別の観測者が量子的微細な、すこしづつちがう『原因』を観て、《Parallel World Program》の制作動機とまったくちがう『結果』を導けるはずだ」

「シンシアがいたら如月さんは生きていないことになるんじゃない？」

「二人とも生きている時間を発見すればいい」

さっきから、なぜかふとよぎる言葉がある。無数に、重なる過去がうつしだされるもの。

ちょっと前に、真昼ちゃんと臯でこの話をしていた。

貴那崎雄也は組んでいた腕を解いて聞く。

「具体的にはどうすればいいんだ？」

「システムを直すわけじゃないんだ。これは——」

ある一点でありながら、無限であり微妙に異なる。いや、無数にうつるけど、限界があるんだ

ったっけ。たしか、それは.....

「――そうか、“合わせ鏡”だ」

「うん.....？」

「だから“合わせ鏡”だよ、真昼ちゃん。.....僕なら“無数の僕自身”を観測できるんじゃないかな？」

「.....まったく、お前は」

「あ.....なんか余計なこと言ったかな？」

「.....いつからそんなに面白いヤツになったんだ.....！」

“無数の僕自身”を観測するには“合わせ鏡”を使う。その考え方でいけば、『如月が生きている』可能性にたどりつけるかもしれない。おおまかな理由は三つある。

- 一つ。僕には「赤い世界」と「現実の世界」が、左右それぞれの眼で観えること。
- 二つ。僕が一方の視界で、自分以外の微妙に異なる世界を観るために“合わせ鏡”を使う。
- 三つ。僕は他方の認識を一方に移すことができる。

一つめはいままでと変わらない。二つめと三つめが重要になる。

「それで？ 具体的な“合わせ鏡”はどんなんだ？」

わかってるクセに。真昼ちゃんが聞いてくる。だからそれにこたえる。

「僕が鏡を“観る”とき観ている視界は四つ、……そして無数に増えるはず。そして光の状態が違うんだから、それぞれの自分は異なる存在なんだ」

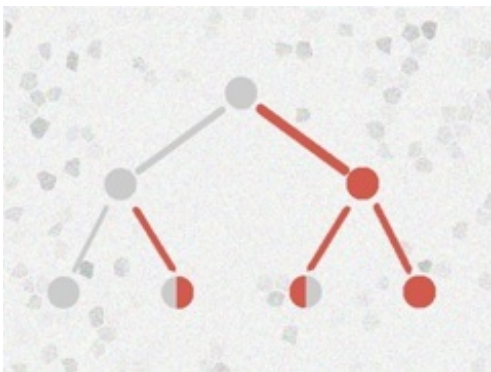
真昼ちゃんのメモをとって、自分なりに書き込んでいく。

つまり、存在する僕は……

——赤い世界で僕が観る自分／現実の世界で僕が観る自分

僕が、僕自身を観ると……

——赤の赤／赤の現在／現在の赤／現在の現在



……と、これがネズミ算的に増えていく。

「……ということなんだけど？」

「なるほど、面白い」

「ああ。……実に興味深いな」

双方、論文でも読んでいるような顔で簡易表をながめる。

「なら、見つけたとして。肝心のその世界となにをどうするつもりなんだ？」

「『人間原理』が正しいのなら、観ている自分をどう認識してもいいんだよ。認識を移動できるなら、ある認識への移行もできるはず」

「……………なら、その準備はどうする？」

真昼ちゃん表情が真剣みを帯びる。……もしかしたら、気づかれたかもしれない。

「冗談だよ。俺と貴那崎ならつくれる」

いや、これは気づいてるな。なんたって真昼ちゃんだからな。

「そんなことより、これ外してよ～」

声のもとをふりかえる。パソコンの机では仮本優衣がシンシアの力を借りて縄をほどこうとしていた。

……もう一度みた真昼ちゃんは、まったく笑っていなかった。

彼はわかっている。この考え方の欠点に。

トッカンテッカンと二人の作業は続く。その間、僕と優衣はながめてるだけで、シンシアは寝てしまった。まったく無邪気なものである。

“合わせ鏡”のシステムは真昼ちゃんが、プログラムの改変は雄也がしている。もちろん、大部分の入出力装置を真昼ちゃんが設計していく。

「雄也が処理をしないといけないじゃ？」

「いや。そもそもの目的が、いまではちがう」

茫然とするうちにナンカスゴイものができていく。鏡面とコンピュータが繋がれている、という構図が左右対称にできあがる。

「……よし、完成だ」

なんだか思っていたよりも早い。それだけ、僕はある一つの考えを危惧しているのかもしれない。ふと、ふりかえる夜景の光の数は、到着時の半分だ。

「装置が駆動したら、この中に立ってカタギが自分自身を“観る”。そして最適な過去を選びだし、それを現実にする……」

「それだけなのか、意外と簡単だな」

……いや違う、それだけではないんだ。

「それは入ってからのカタギ次第だろうよ？」

鏡の両端から、さらにケーブルが繋がる。シンメトリーに中座するデバイスが起動した。低音がビルの一室にウォンウォンと響く。パッとみた限りではなにもかわっていないが、僕にはわかる。これは《Parallel World Program》と同じか、それ以上の禍々（まがまが）しさを持っている。

真昼ちゃんがさりげなく手を伸ばす。気が付いたら彼の腕をとって移動させていた。

「彼はどうしたんだ？」

「ちょっと、“あっち”じゃないとできない作業があるらしいんだ」

嘘だ。

「……………そうか」

貴那崎雄也から少し距離をとって、真昼ちゃんだけに話す。

「……やっぱり真昼ちゃんは気が付いてるね？」

「……さあ？ 俺はお前を『このウソツキめ』と罵（ののし）ったりしないつもりだぞ？」

「……………」

「いってみろよ。知ってるかもしれないが、俺は仮説をきくのが好きなんだ」

僕が『如月さんが生きている』時間をみつけるのは、シンシアとの出会いを無駄にしないためだ。その可能性があるならといいきかせる。少しためらいがちになった。息を吸って……吐いて……。もう一回吸う。

「……仮に……………僕がその『如月さんが生きている』そしてシンシアになにもおきていな時間を見つけたとして。僕は間違いなくそれを観測していないはずだ」

「それで？」

「……だとしたら、この赤い世界が観える僕が邪魔になる」

「……………それでは？」

真昼ちゃんは親友だ。彼ならおそらく、ちょっとぐらい突拍子がないことでもやってくれる。
親友というものはそう接するものじゃないだろうか？

仮本優衣が持っていた銃を、真昼ちゃんに渡す。

「真昼ちゃん。……僕が合図したら、ちょっとそれで右眼を撃ってくれない？」

「……………面白い」

彼が銃を受け取ると、装置の真ん中に立ち。眼を————開いた。

——分裂する。過去が分裂する。

赤い世界で僕が観る自分と／現実の世界で僕が観る自分が——僕自身を観測する。

さらに、それを観た僕自身が分裂する。

赤い世界の僕を赤い視界が／赤い世界の僕を視界が／現在の僕を赤い視界が／現在の僕を視界が——

現在を基点に、観ているということを除いた様々な過去が乱立する。数字は量子的差異の範囲でしか増えていないが、その数だけ世界が増えていく。

——赤の赤の赤／赤の現在の赤／現在の赤の赤／現在の現在の赤／赤の赤の現在／赤の現在の現在／現在の赤の現在／現在の現在の現在——

増える、増える。世界は増えていく。億の世界からは誰かが死に、あるいは死なない過去が生まれ始める。

ある過去で青空真昼はすでに死んでいた、貴那崎雄也が死に、仮本優衣も双葉慎詩亜もない過去が存在した。しかし、その世界はすべて数値的パラドックスを弾きだし、修正された。だから僕はそれらを選ばず、さらに世界を増やしていく……。

やがて世界が10の24乗を超えだす。自身を観測するという概念は希薄になる。その頃になり、僕は事故から『如月が生きている』時間を探し出す。

赤と白の視界が縦縞にあふれる。まるで自分の名前のようにだと思いながら、遠くで“僕”が見渡す。

『如月が生きている』時間を見つけると、シンシアを結びつける過去がなくなる。彼女の両親が死ぬ。その過去は変わらない。

縦縞だけでは足りない。ならばと横縞にも世界が描かれていく。幾何学模様が“僕”を覆う。もはや朱縞模という存在はただの記号論的な役割でしかなくなる。タイリングされたパターンから、任意のフラクタルを除外する。そこから市松模様が生まれる。それでも足りない。



.....そして、世界がグーゴルプレックスへ到達する。長い時間がかかったようにも思える。しかし、ここでは実在の時間は意味をなさない。そこではシンシアが元のシンシアとしての過去ではなく、貴那崎の子供であるという世界が存在した。

(――みつけた！)

“僕”が許容する範囲の視界は、逆に“僕”を内包するドームと化していた。忘れかけていた自我を取り戻す。球状の空間にぼつんと浮いているような感覚。

さぁ！ リニアサーチは終わった！ これから線形探索された世界を起点に数字の羅列を再構成し、矛盾のない世界に戻すのだ。

(――まわせ！)

紅白に染まるミラーボールのような空間がゆっくりと駆動する。縦に網目が動き出す。横に格子が歩き出す。動くたびに赤がひとつ、白がひとつと徐々に消えていく。

(――まわせ！ まわせ！ まわせ！)

回転する。そう、これは僕の意思にあわせて動くのだ。巨大なルービックキューブのマス目が合うと、たちどころに世界が消失していく。景色の縮小のたびに、意識は膨張していく。音なき轟音を唸り散らし、色が吹き飛ぶ。あったかも知れない過去が消失する。

そこには.....そこには理想の数列が存在する。

やがて――

やがて、そこに至福が訪れた。

そこでの貴那崎雄也は《Parallel World Program》を起動していない。なぜって？

野暮なことを聞く。その隣にいる彼女が如月さんだ。

偶然にも僕の家近くに越してきた二人の挨拶にシンシアが来たのを覚えている。名前と恰好が同じで、アルビノではない。……ほんとうに彼の娘になってしまったな。

春など既に過ぎ去っているこの頃。親があまり帰らない僕の家、ときどきシンシアが遊びに来ることが多くなっていった。

……貴那崎はプログラムの研究をこれからも続けていくそうさ。

大きな変化はそれだけではない。

仮本優衣はもちろん普通の生活に戻っていた。退屈そうさ。

シンシアの変化にともなって、真昼ちゃんとは疎遠な仲になった。それに伴って、皐ともあわなくなった。なぜなら――

.....ちがう。僕は重大なミスをしている。

これはまちがいだ。この世界はたしかに、ある一つの理想だ。

でも.....ちがう。結果が正しくても、これではエラー処理でしかない。

なぜなら――

僕という存在は、他の世界のどこにもいない。

無理やり発現した僕にあわせて――宇和皐は必ず死ぬ。

(.....僕だ.....)

いや、正確には“両眼の色の違う朱縞模”はどこにもいなかった。

考えてみれば当然だ。僕に両親なんていただけろうか？ 名前は？

《Parallel World Program》はなにも実行しないだって？ ちゃんとやっているじゃないか。だからこ他の人間ではなく、まさきにシンシアと出逢った。

だいたい、どうやって市場に流れる前に目薬を手に入れた？ 片目だけ点（さ）すという偶然がそう簡単に起こりえるだろうか？

(――僕が《Parallel World Program》なんだ！)

だとしたら.....。この“至福の数列”の現在においても、まだやることは残っている。

すかさず、銃を構える真昼ちゃんに手をかざす。

「真昼ちゃん！ ちょっとまって！」

“合わせ鏡”では永劫に続く時間を漂っていたようにも感じた。でも“こっち”では一瞬の出来事だ

。

「どうした？ システムに問題発生か？」

「ちがう、そうじゃない。けど失敗した」

「.....どっちだよ.....？」

いいながら真昼ちゃんは銃をおろす。

「『如月さんが生きている』世界はみつかった.....けれど」

「けれど？」

「.....臆が必ず死ぬことになる」

真昼ちゃん表情が険しくなる。訝（いぶ）しげな視線になりながら続ける。

「説明は難しい.....というより、ことなる世界で、ことなる結果になるから一概にはいえない...
...だけど」

「.....だけど？」

「いまなら.....真昼ちゃんを過去に送れる」

そこまでいってから、真昼ちゃんはあきれたように顔を変える。

「.....おいおい、なんだよそれ」

「いま.....僕の“左眼”——というより左脳は『如月さんが生きている』世界にいる」

「もしかして.....。眼、みえていないのか？」

「というより、意識が分断されてる。ついさっき、別の人格になった」

『如月さんが生きている』世界を確認した僕の左脳は『脳分離』によって、その世界だけ認識が統合・上書きされている状態だ。

「.....それで、過去に送れるってのは？」

「なんで、この“赤い世界”が赤い空とゆがんだ背景なんだと思う？」

「さあ？」

「“赤い世界”は現実の世界と逆向きに時間を流している。これは恐らく貴那崎がプログラムをつくらるとき、なにかしら仕組んだことだ」

「.....それで？」

「この状態で両目を閉じて、真昼ちゃんを問題の“事故”に連れて行く」

「なるほど、両目を閉じることでどうなるかはまだ考えてなかったな」

「それだけじゃないよ？」

ただのあてつけ、こじつけ。それでも僕が彼の名前を思うのであれば、こう言わずにはいられない。

「『回折限界』が正しいんだったら、『赤い光』より『青い光』で書き込んだ方がより多く情報を書き込めるんじゃないかなかったっけ？」

と、“朱”縞模は“青”空真昼にいった。そうして彼に手を伸ばす。

「.....ああ、そうだったな」

双眸を閉じ、さしだされ腕を引いた。

白波が海を扇（あお）ぐ。大空はきょうも真澄よ。

“事故”は船上一一いや、海上にておこった。

青空真昼は甲板を踏む。手にはまだカタギの感触がある。にもかかわらず、そこには誰もいない。

けれどわかる。いま、まさにカタギとはこの右手で繋がっていて、これが夢ではないのだと。

「……それで、いったい何がおこるっていうんだ？」

試しに真昼は虚空に話しかけてみる。するとそこから返答がある。

（“とってもわかり易い”（イツツ、イージーだ）よ。豪華客船が突如として炎上し、やがてエンジンが爆発して横転、自重に耐えきれなくなって真ん中から二つに折れて、そして沈没）

「救命ボートとか、そういうのは？」

（なんと、“偶然”ボート定員より人の数が多い。……数列は絶対だね）

「ああ、まったく“よく”できてるね」

思わず空を眺める。カモメも飛んでいない、雲もない。……ということは随分と沖まできてやがるな……。

（あのとき一一皐は、部室にいくまでシンシアがみえてた。だからこの結果はただの偶然じゃない。それに）

「……それに？」

（いままで僕は『如月』を苗字だと思ってたけど、違ったんだ。彼女の名前は『宇和如月（うわきさらぎ）』）

「……………つまり」

（そう、皐の姉だ。……宇和家はどうやら生まれた月で名前を決めたらしいね）

「……そうか。……………なあ？」

（……なに？）

「空がなんで青く見えるか知ってるか？」

（……………さあ……？）

「光が極小な物質にあたると、その知久散乱の仕方が、色によってちがう。これをレイリー散乱という」

（……それで？）

「空気の主成分の窒素分子や酸素分子に太陽光線があたると、このレイリー散乱がおこる。そして、光の波長のながい赤い光より、波長のみじかい青い光の方がたくさん散乱される。本当は、青よりも波長がよりみじかい紫の方がもっと散乱されるが、人間の眼は、紫の光よりも青の光の方が10倍もよくみえるから、紫ではなく青にみえる」

（……………そうなんだ……）

「……つまり、この空は青でもあって、紫でもある。人の認識でかわるかもしれない」

青空真昼は、ふうと息を吐き、海風にあたるように欄干へとよる。

「だったら俺はただの“真昼ちゃん”で充分」

水底はバッチリみえない。水平線も遠い。救命ボートなんてもとからアテにならないだろう。

「……人は、時としてどちらかを選らばないといけないことがある。人生は選択の連続だ。だから普通のヤツならこんなとき、片方を選ぶべきだ」

たしかに、真昼ちゃんの言うことは正しい。

(……だったら、真昼ちゃんに任せるよ)

「そうか……だったら」

水面を顧みて、船室のほうを向きながら彼は続ける。

「俺は、そんなのつまらないと思うんだ」

知ってる。青空真昼という人物ならそういうこというだろうと思った。

「さ～て、きょうは———泳ぐぞ」

そういつて、青空真昼は準備体操をはじめめる。

「……ところで、あと何分？」

(一分ないよ。二人とも客室でねむってる)

「そいつぁ助からないわけだ」

いいながら、青空真昼は客室へ走る。

走りながら、青空真昼は繋がれた右腕に語りかける。

「これはあくまで予想だが、『如月が死んだ』世界では皐は途中で起きるはずだ」

(どうしてそう思うの?)

「ここは外部と情報が遮断されている。もしあいつがそれを考えて今後成長したのなら……」

(ウワサ好きになるって?)

「わかってるじゃないか」

(ほんとにそう思う?)

「ここでは誰にも声が届かない。……それを覚えてたら、そんなふうにもなるかもしれない」

爆発。ほかの客はぞろぞろデッキに出ている。刹那、轟音が船体に唸る。響くのは鈍い震え。船は崩壊をはじめ。まずい、船体は傾きだす。有名な映画のワンシーンのよう。

「早いな、さすがの俺も船の修理も操縦もできない」

(真昼ちゃんにできないことってあるんだ……)

「そりゃああるさ」

ねむってる。もしくはいくつかの世界ではショック状態になるなど、宇和姉妹は外に出れる可能性が低い。いまは運命の扉の前。ここからが姉妹の命運をわける。

ダンッと開くと、宇和如月に被さるように宇和皐がねている――いや、気絶だろう。どこかに頭を打ちつけたんだ。いまは理由を考えるべきではない。

真昼は二人を慎重に背負う。そして、常備している縄をとりだす。

一瞬右手を開いてしまいそうになる。ダメだ。繋がりが途絶えたらどうなるかはわからない。……なので紐を片手で結ぶ。

左手に先端をもち、宇和姉妹ごと巻き込んで背後に回す。送り返す中ほどを捻り、輪をくぐって元の紐をターンして穴に戻る。結びの王様、片手の『もやい結び』。

浮きになりそうなものを巻き込みたかったが、もはや躊躇(ちゅうちょ)している余裕もない。二人を抱えて外に出る。

“偶然”にも救命ボートは出払っていた。乗れたとしても定員オーバーらしい。

間一髪のところ浸水をまぬがれて脱出した青空真昼は紐の再確認だけすると、できるだけ軽装になり、海へとびこむ。

……至極、注意を払ったのは、二人が息をしているかどうか。次に足がつかないことを祈った。進む距離は太陽から割り出し、夜空の北斗七星が出るのにかけた。

もっとも過酷だったのが十六時間を過ぎたところで、足がつかりそうになったことだ。そのとき右手が引っ張られるような気がしたのはムシのいい錯覚だろう。

さすがに冷える。若干、温度感覚が遠のいている気がする。

夜の星座を頼りに、彼は泳ぐ。

.....夜が明けて、初めて陸地が見えた。

意識はまだある。ここからおよそ八時間あればつきそうだ。

青空真昼は泳ぐ。ほとんど無謀な賭けに挑む。

.....陸地についた。

砂浜の色がハレーションを起こしていた。砂と石と貝殻で足を切るのをいとわず、二人を歩道
際まで背負って歩く。

紐の結び目は濡れて硬くなっていた。すこし解くのに時間がかかる。

ゆっくりおろしたつもりがどさりと落としてあわててしまう。.....それでもおきなかつたよ
うだ。

「.....誰か.....俺が“観える”ヤツ.....いないかあ.....！」

よかった、向こうから、何かとかけてくる人がいる。

薄れゆく意識のなか、最後に、どこに着いたのかを確認して、思わず笑ってしまった。

「なんだよ.....世津戸かよ」

——そこで意識が途切れ、青空真昼の右手が引かれる。

「……それで、……お前はどうするんだ」

(もう、“僕”が存在する意味はないはずだから。あとはプログラムが終了するまで、眼を閉じてればいいだけかな)

「そうじゃなくてだな……どっか別の世界に意識をリンクさせてハッピーエンドとはいかないのか？」

(残念ながら。《Parallel World Program》自体がそういう性質をもっていないから無理みたい)

「……そうか。……それで俺はどうなるんだ？」

(真昼ちゃんは、この世界の未来に送り届けるよ)

「そこに、お前はいるのか？」

(いるけど、同じ容姿の別の人だね。“赤い世界”を覗ける僕はもう他の世界にはいない)

「どうにかしようとはまったく思っていないな？」

(……僕は臆病だからね)

「その臆病さが世界を救うこともある」

春、昼飯。僕はできるかぎり平穩をもとめてクラスから離れた。

野外もアレなので、教員の棟あたりにいけば問題なからう。

——そこで出会ったのが、紙パック牛乳信者。青空真昼こと、真昼ちゃんだ。

このときは、「世界を平和にしたいなら、まず人間を抹消すべきだね」なんていわなかったけど、それこそ周りの人が離れていく原因だと思う。人のことは言えない。「そうだね」とかいったし——。

とにかかくにも、彼の窮理研究の第一授業は空の色についてであった。唐突！

「空がなんで青く見えるか知ってるか？」

「ええっと……さあ？」

「光が極小な物質にあたると、その知久散乱の仕方が、色によってちがう。これをレイリー散乱という」

「へえ……」

きっと、あんまり興味がないから、苦笑いとかしながらきいてたと思う。

「空気の主成分の窒素分子や酸素分子に太陽光線があたると、このレイリー散乱がおこる。そして、光の波長のながい赤い光より、波長のみじかい青い光の方がたくさん散乱される。本当は、青よりも波長がよりみじかい紫の方がもっと散乱されるが、人間の眼は、紫の光よりも青の光の方が10倍もよく見えるから、紫ではなく青に見える」

「じゃあ、つまり——」

「……ん？」

「あ、いや例えばなんだけど。……生まれつき赤がみえやすい人の空は赤っぽいのかな？ ほら、文化によっては特定の色が見えやすかったりとかするでしょ？」

たしか、色盲だと、赤と緑でさえ区別がつきにいはずだ。だから、そういうこともあるかもしれない。

「そうだな……それは……」

「……………それは？」

「観てからのお楽しみってとこだな」

――我々が観ている光景を疑い、信じることはとても重要だ。
観えるという解釈そのものが認識の一つの在り方だからだ。

そこに観えているものだけが、世界の全てではない。
だが、観えているものはまぎれもなく世界の一部である――。

ならば、どうすればいい？

青空真昼は考える。それならば、朱縞模を呼び戻す方法があるはずだと。

いまからそう遠くない未来にそれは可能になるだろう。

世界の狭間に閉じ込められた彼を助けだせるのだろう。

《Jack Junk》を經由し、《Real World Program》を乗り越え、《Signalio》へ至るのだろう。

だからこのお話はもう少し続く。

To Be Continued

Next stop 《Jack Junk》 .

Parallel World Program

<http://p.booklog.jp/book/48044>

著者：マサヤン

絵：古論

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48044>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48044>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.